

よはわけ、このよはわけぬ、いりておさねん、このとひらかせ

古事記八千矛神御歌、佐用波比爾云、佐怒都登理、岐藝斯波登與牟、爾波津登理
加那波那久、云々繼體紀勾大兄皇子の御歌にも同語有、左雲理の左は發語か、又
こゝは淺の畧か、ぬつとり枕詞、さよはわけ云々、遠き道に雨雪さへ降て、妹許至
りやらで明たる也、ひらかせはひらけを延言、零來の下奴一本になし

反歌

隱來乃。泊瀬少國爾。妻有者。石者履友。猶來來

こもりくの、はつせをくに、つましわれが、いしはふめども、なほぞきにける

はつせをくには、よし野の國なといふ類也

隱口乃。長谷小國。夜延爲。吾大皇寸與。奧床仁。母者睡
こもりくの、はつせをくに、よはひせず、わがせのきみよ、おくとこに、ははねた
有。外床丹。父者寢有。起立者。母可知。出行者。父可
り、とつとこに、ちゝはねたり、おきたば、はしりぬべし、いでゆかば、ちゝしり
知。野干王之。夜者去昶奴。幾許雲。不念。如。隱麗香聞
ぬべし、ぬばたまの、よはわけゆきぬ、こゝたくも、おもふことならぬ、しぬびづまかも

天寸八寸與
皇夫與
力ノ

夜しのびてからうして通ふを夜ばふといふ、大一本夫に作る、吾大皇寸與は吾夫
寸美與と書るが誤れるなるべし、春海云、大は夫の誤にて、皇寸は尊一字の二字
に誤ならん、わがせのみことよと訓べし、いづれにても有べし、人を貴みいふも
限こそわれ、わが夫を天皇などかりにもいふべきにわらず、出ゆかば、戸口へ出
は也、宣長云、末二句おもはぬがごとしぬぶつまかもとよまんといへり、猶考べ
し

反歌

川瀬之。石迹。渡。野干王之。黒馬之來夜者。常二有沼鴨

かはのせの、いしふみわたり、ぬばたまの、こまのくるよは、つねにあらぬかも

黒馬と書るは、うめを鳥梅と書る如く、字音をとれる也、常にあらぬかといふは、
常にあれかしと願ふ言也、こゝの意は、親にもしられて、常に通來て、わふよしも
がなど、今より後をねがへり

右四首

次嶺經。山背道乎。人都末乃。馬從行爾。已夫之。步從行者。
つきねふ、やましろぢを、ひとづまの、うまよりゆくに、おのづまが、かちよりゆけば、

每見・哭耳之所泣・曾許思爾・心之痛之・垂乳根乃・母之形見跡・
みるごとに、ねのみしなかゆ、そこもふに、こゝろいたし、たらちねの、は、ががたみど、

吾持有・眞十見鏡爾・蜻嶺巾・負並持而・馬替吾背

わがもたる、まそみかゝみに、あきつひれ、おひなめもちて、うまかへわがせ

つきねふ枕詞、反歌に泉河をいひしは、古へやまどに住人の、山しろへ行事有
をいふなるべし、人づまは他人の夫を云、おのづまはおのれが夫をいひて、例多
し、たらちねの枕詞、まそみ鏡は、眞澄日マシメの鏡の轉たる語也、あきつひれ、女裝束
の領巾をもいへど、これは類聚雜要、或は雅亮裝束抄に載たる、鏡の具の比禮な
るべし、鏡に添たる比禮は蜻蛉の羽の形したる物なれば、あきつひれといふべ
し、おひなめもちては右の二つを並べ負持ゆきてといふ也、馬かへは、馬どかへ
よの略也古しへは物と物とを相替たれば也

反歌

泉河・渡瀬深見・吾世古我・旅行衣・裳沾鴨

いづみがは、わたりせふかみ、わがせこが、たびゆきごろも、すそぬれむかも

延喜式雜式云、凡山城國泉河樺井渡瀬者、官長率東大寺工等、毎年九月上旬造

誤蒙ニテ

吾間之可婆・夕卜之・吾爾・告良久・吾妹兒哉・汝待君者・
わがとひしかば、ゆふうらの、われに、のらく、わぎもこや、ながまつきみは、

奥浪・來因白珠・邊浪之・緣流白珠・求跡曾・君之
おきつなみ、さよるしらたま、へつなみの、よするしらたま、もとむとぞ、きみが

不來益・拾登曾・公者不來益・久有・今七日許・早有者・
きまさぬ、ひろふとぞ、きみはきまさぬ、ひさならば、いまなぬかばかり、はやからは

今二日許・將有等曾・君者聞之二二・勿戀吾妹
いまふつかばかり、あらんとぞ、きみはきこし、なこひそわぎも

此人國官などにて行し時、紀の海は玉の名有所故に、拾て來んぞと云て別しをも
てかくいへる也、妹の山、せの山、上に出、夕卜は日の暮がたになす故いふ、われ
にのらくは、他人のもの語して過るを聞て、我事おとりなす占なれば、即それを
我に告る語とす、つぐらくと訓たれど、卜にはのるといふが定也、久有の下者の
字を落せり、卷八今二日斗あらば散なん、卷九吾ゆきは七日は過じ、卷十七長歌
に、近くあらば今二日たみ遠くあらば七日のうちは過めやもともよめり、な戀そ
わぎもまて占の語也、是も女の歌のめでたき也、

假橋云、今本裳を蒙に誤れる事しるければ改つ
或本反歌曰

清 鏡・雖持吾者・記 無・君之步行・名積去見者
まそかひみ、もたれどわれは、しるしなし、きみがちより、なづみゆくみれば
しるしなしはかひなしといふが如し、なづみ上に出

馬替者・妹步行將有・縦惠八子・石者雖履・吾 二 行
うまかへば、いもかちならん、よしゑやし、いしはふむとも、わはふたりゆかん

此一首男の答歌也、これは妹許通ふ時ならで、故有て妹と吾二人行時の事を、か
ねていへり、右清鏡の歌は反歌にて、此馬替者の歌に和歌と有けんが落たる也

右四首

本國之・濱 因 云・鯨 珠・將拾跡云而・妹乃山・勢能
きのくにの、はまによるとふ、わはびたま、ひろはんといひて、いものやま、せのや
山越而・行之君・何時來座跡・玉梓之・道爾出立・夕ト乎・
まこえて、ゆきしきみ、いつさまさんと、たまほこの、みちにいでたち、ゆふうらそ、

反歌

杖衝毛・不衝毛吾者・行目友・公之將來・道之不知苦

つゑつきも、つかずもわれは、ゆかめども、きみがさまさん、みちのしらなく
杖をつきてものを略り、道に行違はんかとおもふ意也、卷三長歌、天地の到れ
る間杖つきもつかずも行てもよめり

直不往・此從巨勢道柄・石瀬踏・求會吾來・戀而爲便奈見

たゞにゆかず、こゆこせぢから、いはせふみ、とめぞわがこし、こひてすべなみ
たゞにゆかずは、石瀬ふむ道をことわる也、こゆはこゝよりにて、こせといふま
でへかゝれり、からはより也、是は右の長歌よめる女の夫史生などにて、紀路へ
行しが、暫の暇を得て、歸れる時、妻へ與へしなるべし其答にはあらねど、同じ度
の歌なる故右の反歌の次に載せし也と翁はいはれき、宣長はこれも同じ女の歌
なるべし、道のしらなくとはよみつれども、なほ思ひかねて出立行ならんといへ
り

左夜深而・今者明奴登・開戸手・木部行君乎・何時可將待
さよふけて、いまはわけぬと、とひらきて、さへゆきしきみを、いつどかまたん

右の男しばし有て、又紀の路へ行を、女の悲みたる歌か、又は是より二首は別の贈答にも有べし

門座郎子内爾。雖至。痛之戀者。今還金

かどにをる、をどめはうちに、いたるとも、いたくしこひば、いまかへりこん

門まで送れる女の、わが屋の内へ歸り入はどの暫の間ありともといふ意か、未はいたく戀とさかば、今の間に立歸り來んぞと、いひなぐさめて別るゝ也、郎子は娘子の誤なるべし、考の別記に委し、金は音をかりたるにて、將來也

右五首

譬喻歌

師名立。都久麻左野方。息長之。遠智能小菅。不連爾。伊莉持來。

しなてる、つくまさぬかた、おさながの、をちのこすげ、あまなくに、いかりもちさ

不敷爾。伊莉持來而。置而。吾乎令偲。息長之。遠智能子菅。

しかなくに、いかりもちさて、おさて、われをしぬばす、おさながの、をちのこすげ

しなてる枕詞、都久麻と息長は近江國坂田郡也、しかれば左野方はその筑摩郷の

内、遠智は息長の内に在所名也、諸陵式息長墓在近江坂田郡とみゆ、此男筑摩の額田に住に、遠智といふ所の菅を刈持來たりといふ也、卷七に眞珠づくをちの菅原ともよみたれば、菅を出す所なるべし、左野方の左は發語、いかりのいも發語也、さて薦にあみ敷ともなく、徒に刈もて來置てといふは、此女の我に隨ふさまなから、逢事もなきをなげく也、卷十一にも、みよしのゝみくまが菅をあまなくに刈のみ刈てみだれなんとやと有、翁のいへらく、未に二たびいふは、其事を深く歎くにつきて、返すゝいふにて、あはれ深し、古人はかゝる所に妙なるみやび有といはれき、今古風を好みよむもの、猥にこをまねぶたぐひあれば、こゝにやうなき事ながら、更におどろかしおくのみ

右一首

挽歌

桂纏毛。文。恐。藤原。王都志彌美爾。人。下。滿。雖

かけまくも、あやにかしこし、ふぢはらの、みやこしみに、ひとはしも、みちてあ

有。君。下。大座常。往。向。年。緒。長。仕。來。

れども、さみはしも、おほくいませと、ゆきむかひ、としのをながく、つかへきて、

君之御門乎。如天。仰而見乍。雖畏。思憑而。何
さみがみかどを、わめのごと、わふぎてみつ、かしこげど、おもひたのみて、いつ
時可聞。日足座而。十五月之。多田波思家武登。
しかも、ひたらしまして、もちづきの、たはしけんぞ、

しみ、は繁くも、人下の下は詞、卷廿人さには美知豆波安禮村とよめり、君下の
下も詞也、おほくはいませせどとは、皇子たちは其外にも多くませせどといふ也、
大は多の義也、翁はおはましませどもよみて、おはしますといふは大ましますの
略也といはれつれど、いかゝあらん、往むかひは、宣長云外にも君はませせども、わ
さて此君に心よせて仕奉るよし也といへり、おもひたのみては末の御榮を待也、
ひたらし、古事記御子生ます時詔に、何爲日足奉答白取御母定大湯坐若湯坐宜
日足云く、是生れ子の日を足するを云、十五の下夜の字落しか、たはしけんぞ
満湛る也、卷二日並皇子命殯の時の長歌おも、望月の滿波之計武跡とよめり

吾思皇子命者。春避者。殖槻於之。遠人。待之下
わがもへるみこのみことは、するされば、うゑつさがうへの、とはつひと、まつのし
道湯。登之而。國見所遊。九月之。四具禮之秋者。大殿之。
たみちゆ、のぼらして、くにみあそはし、ながづきの、しぐれのあきは、おほどの、

砌志美彌爾。露負而。靡芽子乎。珠手次。懸而所憇。三
みぎりしみくに、つゆおひて、なびけるはぎを、たまたすき、かけてしぬばし、みゆ
雪零。冬朝者。刺楊根張梓矣。御手二。所取賜而。
さふる、ふゆのあしたは、さしやなき、ねはりあづさを、おほみてに、とらしたまひて
所遊。我王矣。煙立。春日暮。喚犬追馬鏡。雖見
あそばし、わがおほさみを、けふりたつ、はるびのくれに、まそかみ、みれど
不飽者。萬歲。
あかねば、よろづよに、

殖槻今昔物語に敷下郡殖槻寺と有、神樂歌に殖槻や田中のもりといふも同じ、遠
つ人枕詞まつの下道ゆ松に待を兼、國見遊はし是御遊の時なればいふ、玉たすき
枕詞、懸てしぬばしは御心にかけて也、さし柳枕詞、梓どのみいひて弓の事とせ
り、上の根張は刺木にしたる柳の根といふまで句中の序にて、張梓といふが則弓
也、御手の上大の字を脱せり、煙立はかすみをいふ、春日のくれに長さ日も暮ま
でにといふを略ていへり、まそ鏡枕詞、

如是霜欲得常。大船之。憑有時爾。涙言。目鳴。迷。
かくしもかもと、おほふねの、たのめるときに、なくわれが、めかもまどへる、

大殿矣。振放見者。白細布。飾奉。而。内日刺。宮舍人
 おはどのを、ふりさけみれば、しろたへに、かざりまつりて、うちひさす、みやのど
 方。雪。穗。麻衣服者。夢。鳴。現前鳴跡。雲入夜之。迷
 ねりは、たへのほの、あさきぬさるは、いめかも、うつしかもと、くもりよの、まど
 間。朝裳吉。城於道從。角障經。石村乎見乍。神。葬。
 へるはどに、あさもよし、さのへのみちゆ、つねさはふ、いはれをみつゝ、かんはふり
 葬。奉。者。往道之。田付叫不知。雖。思。印乎無見。雖
 はふりまつれば、ゆくみちの、たづさをしらに、おもへども、しるしをのみ、なげい
 嘆。奥香乎無見。御。袖。往觸之松矣。言不問。木。雖。在。
 ども、おくかをのみ、おほみそで、ゆきふれしまつを、ことゝはぬ、さにはあれども
 荒玉之。立。月。每。天。原。振放見管。珠手次。懸。而
 わらたまの、たつゝきごとに、あまのはら、ふりさけみつゝ、たまだすき、かけてし
 思名。雖。恐。有
 ぬばな、かしこけれども

涙言は流言か妖言の誤にておよつれかどよむべし言の下一本可の字有、廣宮に
 坐ときくは人の言迷はず歟、白布もて傍ると見るは吾目の惑へる歟といふ也と
 翁はいはれき、宣長は言涙ウガナミの上下になれる也、わがなみたにて目かも迷へるとい
 ふ也といへり、言をわかと訓事集中例有、たへのは、卷一梓の乃穂と書し如く、た
 へは白布の名也、其白さにより雪とも書たる也卷十一に敷白ウキハクとも書り、麻衣喪に
 は公私ともに白麻布を用る事、孝徳紀など合せ見るべし、鈍色は後の事也、くも
 りよの、あさもよしいぬさはふ、枕詞、迷間まどへるは、にとも訓べし、卷二あら
 そふ端かた爾と有、翁の考にいはれは反歌によるに葬まらする地故、其山を望なが
 ら行也、さて飛鳥の北、泊瀬の南に今もいはれといふ山有、卷三角さはふ石村も
 過泊瀬山はつかもこえん夜は更につゝとよめるは、飛鳥の方より北へ向て行時
 也、此歌は藤原都より南東へ向て、其石村にをさめんとて送まるれり、是を以て
 おもふに、城於道は城上郡の磯城といふ所をいふか、又其邊に城といふ地有か、右
 にいふ如くなれば、廣瀬郡の城岳キヤクと甚異也と有、されど此説おだやかならず、城於
 は廣瀬郡の城岳なるべし、於下にいはん、おもへども云々以下の句は、しのび奉
 る心をいふ、なげみもおくかをのみは、今は皇子を見奉るよしもなしと也、行ふ
 れし松上に國見遊ばしといひし所の松を云、あら玉の枕詞、うしを略て月につゝ

けしにて、今よりの歳月をいふ、ふりさけ見つゝは、右の松を仰見る也されば、天の原といへる天を見る如くあふき見る意也、されどなほ原は如の字の誤れるならん、あめのごとく訓べき也

反歌

角障經・石村山丹・白 棗・懸有雲者・皇 可 聞

つねさはふ、いはれのやまに、しるたへに、かゝれるくもは、わがおほきみかも

皇は吾王二字の一字に誤れるなるべし、此歌藤原宮の末の歌とする時は、火葬の烟を雲と見てよめりともいふべけれど、皇極紀に皇孫建王の過給ひし後の御歌にいまさなるをむれが上に雲だにもしるくしたゞは何かなげかんとよみ給へれば、たゞ白雲と心得べし、石村は東の高山につゞきたれば雲懸るべき也と翁いそれき、さて必しも葬まるらせし山ならずともかくもいふべし、翁の考に云、右は或人高市皇子薨ませし時の歌といへるは叶はず、何ぞといはゞ、日足しましてといふは、もと縁兒をいふなるを、強て御若く二十にもたらぬ間まではいひもせんか、そも猶よくはかなはず、然るに高市皇子命の薨ませしは、御とし四十餘なるべければよしなし、又高市皇子命の御墓は、廣瀬郡御立岡と式に見え、且巻二

の同皇子命を申す端詞の、城上狹宮とこゝの城於道とは相似て聞ゆれど、彼は廣瀬郡城岳、こゝは城上郡なるべきよしつばらに論らはれき今按に日足らしの語有と、反歌の石村山を葬ませし地と定しより、高市皇子命の薨の時の歌にあらじとおもひて、此論らひは有也、皇太子にあらすして、皇子のみことといへる例なければ、高市皇子命の薨の時の歌にて、こゝの城於も卷二の端詞の城上と同じく、廣瀬郡とすべしきのへの道ゆといふは、其きのへのかたへ行道よりといふ事也、京へ行道をみやと路といふ類ひいと多し、さて日足らしましてといへるは、此皇子命のいと稚くおはしませしより仕奉りし人のよめるなるべし、又石村山をいへるは右にもいへる如く、必しも葬ませし山ならずとも其わたりの雲を見ても御面影をしのぶ意とすべし

右二首

磯城島之・日本國爾・何 方・御念食可・津禮毛無・城上
しきしまの、やまどのくにし、いかさまに、おもほしめせか、つれもなき、きのへの
宮爾・大殿乎・都可倍奉而・殿 隱・隱 在 者・朝 者
みやに、おほとのを、つかへまつりて、このごもり、こもりいませば、あしたには、

召而使。夕者。召而使。遣之。舍人之子等者。行
めしてつかはし、ゆふべには、めしてつかはし、つかはし、とねりのこらは、ゆく
鳥之。羣而待。有雖待。不召賜者。劔刀。磨之心乎。
どりの、むらがりてまち、わりまてど、めしたまはねが、つるぎたち、とぎしこゝろを
天雲爾。念散之。展轉。土打哭杼母。飽不足可聞。
あまぐもに、おもひはふらし、こいまろび、ひづちなけども、あきたらぬかも

しきしまの既出、つれもなき、此言は連も無といふをもとにて、縁も無意に轉し
いへり、集中無由縁と書るもしか訓べし、城上宮、卷二高市皇子尊城上殯宮とあ
るに同じく、此歌も同尊の殯宮の時舍人の中にてよみたる也、大殿をつかへ奉て
は、陵を造仕奉也殿隱は、陵の内に隠ますと云也、朝には云く以下、舍人が御階の
下、御門など守とをいへり、群而の下待は、侍の誤か、むれてさもらひと有べし、
劔刀枕詞、とぎし心は皇子の御爲に忠なる心を盡さんと思ふ也、天雲に思散らし
は、天雲の如くにといふを略けるにて、心の雲の如くに亂れたいよふ也、卷二、
行方も不知といへるが如し、こいまろびは伏しまろび也、ひづちは涙に漬をい
ふ、此比の長歌に反歌の無はあらぬを、こゝは落失しならん

右一首

百小竹之。三野王。金廐。立而飼駒。角廐。
もしぬの、みぬのおほきみ、にしのおまや、たてゝかふこま、ひんがしのうまや
立而飼駒。草社者。取而飼早。水社者。挹而飼早。何
たてゝかふこま、くさこそは、とりてかへかに、みづこそは、くみてかへかに、なに
然。大分青馬之。鳴立鶴。
しかも、ましろのこまの、いばえたちつる

百しぬの枕詞、三野王天武紀亦徵美濃王、乃參赴而從矣、また小紫美濃王、又栗
隈王之二子三野王武家王云々、其外持統元明の紀にかたぐみえて、和銅元年五
月辛酉從四位下美努王卒、孝徳紀に美努王は栗隈王の子、諸兄卿の父なるよし
ゆ、是なるべし、金角は西東に配するを以てかりて書り、早はかにの言に借たり、
此語穩ならず、宣長云、早は管の誤にて、かひなめなるべし、心は主君はうせ給へ
ども、今も草水をはしく思は、とりて飼なんものを、何しかも鳴ぞといふ也と
いへり、さて東西の廐をいふは、多くの馬の鳴といはんとて也、鳴立はつれ立て
鳴をいふ、大分青馬はたゞ眞白なる意也と冠辭者に委しくいはれたり、按に大分

青馬、ひたをのこまどよまんか、ひたは神代紀に純男ひたををことよめる意にて、大分とも書べし、卷十六人魂の佐青有公がたゞひとり云々といへり、佐は發語にて、あを略きて、をとのみいふは常也、さて左の反歌の衣手の枕詞は常陸とつゞくと同じ意とすべし

反歌

衣袖・大分青馬之・嘶音情有・鳧常從異鳴
ころもでの、ましろのこまの、いばゆるも、ころわれかも、つねゆけになく

衣手の枕詞、あれかもはわればかのばを略ける例也

右二首

白雲之・棚曳國之・青雲之・向伏國乃・天雲・下有
しらくもの、たなびくくの、あをぐもの、むかぶすくにの、あまぐもの、したなる
人者・妾耳鳴・君爾戀濫・吾耳鳴・夫君爾戀禮薄・天・地
ひとは、あのみかも、さみにこふらん、あのみかも、さみにこふれば、あめつちに
滿言・戀・鳴・曾之病有・念・鳴・意之・痛・妾戀叙
いひたらはして、こふれかも、むねのやめる、おもへかも、ころのいたさ、わがこひそ

誤唱
二今

日爾異爾益・何時橋物・不戀時等者・不有友・是九月乎・吾
ひにけにまさる、いつはしも、こひぬときとは、あらねども、このながづきを、わが
背之子・惔丹爲與得・千世爾物・惔渡登・萬代爾・語都我部等
せが、しぬびにせよと、ちよにも、しぬびわたれど、よろうよに、かたりつがへと
始而之・此九月之・過莫乎・伊多母爲便無見・荒玉之・月乃
はじめてし、このながづきの、すぎまくを、いたもすべなみ、あらたまの、つきの
易者・將爲須部乃・田度伎手不知・石根之・許凝敷道之・石床
かはれば、せんすべの、たごさをしらに、いはがねの、こいしきみちの、いはど
之・根延門爾・朝庭・出居而嘆・夕庭・入座戀乍
この、ねはへるかどに、あしたには、いでてなげき、ゆふべには、いりゐこひつ、
烏玉之・黒髮敷而・人・寢・味寐者不宿爾・大船之・行良行
ぬばたまの、くろかみしきて、ひとのぬる、うまいはねずに、おはふねの、ゆくらゆ
良爾・思・乍・吾寐夜等者・數物不敢鳴
くらに、おもひつゝ、わがぬるよりは、よみもわへぬかも

白雲の云く、祝詞に多言にて、遠く向ふ天涯をいひて、遠き國を指也、青雲は青空也、天雲の下なる、是はたゞ天をいふのみ、いひたらはして、上に八十の心を天地におもひたらはしといへるに似て、こゝは天地の神に言舉するをいふ、宣長云言は足の誤にて、みちたらはしてならんといへり、こひぬ時とは、時とてはの略也、語つがへとは、語繼げと也、始てしは、今より語つぐ始にする意にて、死し時をいふ、いたもは痛くも也、月のかはれば、新喪の月のかはり行をいふ、石がねのこゝしき云くは、夫の墓の側らのかり屋に、妻のやどりゐて、其墓所のさまをいへる也、さて烏玉之黒髪敷而以下の九句上の相聞の中に出たり、挽歌のなげさにあらぬ事上にいへるが如し、此長歌の入座戀乍の末より、反歌をかけて、落失たるに、烏玉之以下の九句亂てこゝに入たりと見ゆ、鴨今本鳴に誤れり

右一首

隱來之。長谷之川之。上瀬爾。鵜矣八頭漬。下瀬爾。鵜矣八頭漬。上瀬之。年魚矣令昨。下瀬之。鮎矣令昨。麗妹爾。かづけ、かみづせの、あゆをくはしめ、しもつせの、あゆをくはしめ、くはしめに、

山爾ニテ

鮎遠惜。投左乃。遠離居而。思空。不安國。嘆空。不安國。衣社薄。其破者。縫乍物。又母相登言。玉社者。緒之絶薄。八十一里喚雞。又物逢登日。又毛。不相物者。麗爾志有來。あはぬものは、いもにしありけり

あゆをくはしめは、鵜の鮎を含みて出るをいふ、下瀬の鮎をくはしめまで十句は、くはし妹といはん序也、くはしめは、古事記八千矛神の御歌に、久彼志賣遠わらばこととはさかりと訓へし、されど猶有べくや、なぐるさの枕詞、遠さかりるては居所の遠さにて、上のこととはさかりは相語ふ事の遠さ也、わざと重ねいへりと翁はいはれさ、遠き所に住るおもひづまの死たる歎あるべし、又もあふといへは、あふとへとも訓べし、此たとへにて死をしらせたり、縫古本繼に作るつき

つゝもと訓べし、嬾の下爾今山に誤れり、古本によりて改

隱來之。長谷之山。青幡之。忍坂山者。走出之。宜山
こもりくの、はつせのやま、あをげたの、おさかのやまは、わしりでの、よろしきや
之。出立之。妙山。叙。惜山。之。荒卷。惜毛
まの、いでたちの、まぐはしきやまぞ、あたらしきやまの、あれまくをしも

青ばたの枕詞、和名抄城土郎長谷波都勢忍坂於佐と有、雄略紀舉慕利矩能播都制能野
磨、伊氏拖智能與慮斯企野磨和斯里底能與慮斯企夜磨能據慕利矩能播都制能夜
磨播阿野爾于羅虞波斯阿野爾于羅虞波斯といふ御歌の言をとり用ひてもろく
よろしく、うら妙しき人の死るを譬へて惜む也、此二山もて、一人の人のくさぐ
かねたるをいふ、走出の云く、此言右に引たる紀には、泊瀬一つをのたまひしを、
こゝは二山のさまを分ちいへり、はつせの山は、山の尾前へ廻りて、穴磯山まで
引つゞけるを、走出といひ、忍坂は山立のよろしきといふ也、あたらしき山の、同
紀の歌に、阿拖羅斯積いなめのたくみなど有て、惜むこと也、われまくをしもは、
末をかねていふ也、しかれば此人榮ゆべき世をはやく過て、あたたまぐはしき名
も、失行べき事を、まだ荒ぬ山の、つひにわれ行ん譬にとれるにや

高山與。海社者。山。隨。如此毛現。海。隨。然直有
たかやまと、うみこそは、やまのまに、かくもうつしく、うみのまに、しかもたゞな
目。人者充物會。空蟬與人
らめ、ひとはわだものぞ、うつせみのよひと

まには、今もとのまゝに在をいふ、宣長は山ながら、うみながらとよまんといへ
り猶考べし、現しくは、かけずして世に在也、しくは事を強てする詞、しかもはか
くもに同じ、然の下古本毛の字有、直ならめは、常ならめといふにひとし、人はわ
だものぞ、充を古本花と有ぞよき、たゞちにはなとよまんか、空蟬は顯身也、卷十
六、いさなとり海や死にする山やしにするしねばこそ海は汝干て山は枯すれと
もいへり、右二の長歌はいと古き代の歌也

右三首

王。之。御。命。恐。秋津島。倭雄過而。大伴之。御津之
おはさみの、みことかしくみ、あきつしま、やまとをすぎて、おほきもの、みつのは
濱邊從。大爾。真梶繁貫。且名伎爾。水手之音爲乍。夕名寸爾。
まへゆ、おほふねに、まかぢしゆぬき、あさなきに、かこのとしつゝ、ゆふなきに、

梶音爲乍。行師君。何時來登。大夕ト置而。齋度爾。
かぢのとしつゝ、ゆきしきみ、いつさまさんと、ぬさおきて、いはひわたるに、
枉言哉。人之言釣。我心。盡之山之。黄葉之。散過
たはことや、ひとのいひつる、わがこころ、つくしのやまの、もみぢばの、ちりすぎ
去常。公之正香乎
にきと、さみがたゝかを

大伴の枕詞、水子のとしつゝは舟人の聲也、こゑおと、通はしいへり、筑紫に住て
行し人、住のうち死たるを、京に在妻の聞て悲しみてよめる也大夕ト三字ゆふ
けと訓べけれど、句調はず、奴左とか、幣とか書るが、草書より誤れるなるべし、
枉は狂の誤也、例多し、つくしの山は、待戀るに心をつくすといひ懸たり、末はち
り過にきと君がたゝかを人のいひつると返る意の語也、正香は其人をおもひや
る事にいふ例にてまさかとは異也

反歌

枉言哉。人之云鶴。玉緒乃。長登君者。言手師物乎
たはとや、とひのいひつる、たまのをの、ながとさみは、いひてしものを

是も枉は狂の誤也、上は夫の死しと人のいひつるは、狂言かといひて、下は夫の
いひ慰めて別しをいひ出でなげく也

右二首

玉梓之。道去人者。足檜木之。山行野往。直海。川往
たまほこの、みちゆくひとは、あしびきの、やまゆきぬゆき、たゝわたり、かはゆき
籍。不知魚取。海道荷出而。惶入。神之渡者。吹風母。
わたり、いさなとり、うみちにいで、かしこきや、かみのわたりは、ふくかせも
和者不吹。立浪母。疎不立。跡座浪之。立塞道麻。誰
のどにはふかず、たつなみも、おほにはたえず、しきなみの、たちさふみちを、たが
心。勞跡。鳴。直渡異六
こころ、いとほしとかも、たゝわたりけむ

直海の海は涉の誤なるべし、神の渡左の或本の端詞と、備後國神島濱と有、のど
にはふかすはのどかならぬ也、おほにはたらずは、凡ならず高浪の立所といふ
也、例によるに、疎の字の下者の字有べし、跡座浪は卷二長歌に、おさみれば跡位
浪たち云と書り、跡は敷意、位も座も均し、すべて殿舎の席は、事有時、人々の位

次によりて座を敷設ればかく書て、しきなみは重浪也、立さふは浪の立障る道といふにて、磯きはをいふべし、誰心云ふとは、故郷人の待わらんをいふはしみて、いそぐよくに、此重浪の立障る道を歩わたりしけん云也、さて溺死の事を反歌にてしらせたり、宣長云、これはたゞ川に溺れて死たるが、屍の海へ流れ出て、磯へ打わけられて有を見て、かくよめる也、實に海を渡たるにはあらじといへり

○末に出せる蘆檜木乃云々の歌、家人乃云々の歌、納潭云々の歌三首、右の長歌の反歌にして、こゝに入べきよし翁の考に委し

不告

鳥音之。所聞海爾。高山麻。障所爲而。奥藻麻。枕所
とりがねも、さこえぬらみに、たかやまを、へだてになして、おきつみを、まくらに爲。
蛾葉之衣。浴不服爾。不知魚取。海之濱邊爾。浦裳無。
まきて、まゆのきぬ、すゝきもさすに、いさなとり、うみのはまべに、うらもなく
所宿有人者。母父爾。眞名子爾可有六。若蕩之。妻香有異六。
やどれるひとは、おもちうに、まなごにかあらん、わかくさの、つまかわりけん
思 布。言傳八跡。家問者。家乎母不告。名問跡。名谷母
おもはしき、ことつてんやと、いへとへば、いへをものらす、なをとへと、なだにも

不告。哭兒如。言谷不語。思 軻。悲 物 者。世 間 有。

のらず、なくこなす、ことだにとはず、おもへども、かなしきものは、よのなかにあり
鳥音之さこゆる海と有は誤也、古今集に、飛鳥の聲もさこえぬかく山といへるが
如く、鳥が音もさこえぬ海とこそ有べけれ、之は不の字の誤なる事しるし、枕所
爲を、次の或本枕丹巻と有かたよし、こゝは字の誤れるならん、もしくは爾巻
と有しか、又は所は爾の誤にて枕になしてか、蛾葉之衣は、或人の説まゆのさぬ
と訓べしといへり、卷十四筑之ねのひくはまゆの衣はわれどもよめれば、此
説によるべし、春海云葉は糸の字の誤かうらもなくは、何心もなく也、眞子は實
の子をいへり、思はしき云々は、言傳やらまくおもふ事あらば也、言だにとはず
は、ものいはぬを云、おもへどもは、おもへどくと返しにいふ意也、よの中にあり
は、則よの中なりといふ事也

反歌

母父毛。妻毛子等毛。高高一。來跡待異六。人之悲沙
おもちうも、つまもことども、たかぐに、こんとまちけん、ひとのかなしさ
たかぐには既出、遠く望む意也、或本異を羅に作るかたよし

蘆檜木乃。山道者將行。風吹者。浪之。塞。海道者不行
わしびきの、やまぢはゆかん、かせふけば、なみのさへぬる、うみぢはゆかじ

此歌右の玉梓之道去人者云々の長歌の反歌なるべし、浪の下之の字は立の誤か、
又は之の下別に立の字落たるか、さらばなみたちさふるとか、浪のたちさふとか
訓べし、是は溺死し人の事を聞て、おくれたるもの、恐こみよめる也

或本歌

備後國神島濱調使首見屍作歌一首并短歌

神名帳備中國小田郡神島神社有、卷十五月よみの光を清み神島のとよめるは備
中なるべし、こゝは備中を備後に誤れるにやと契沖いへり、使の下首は主の字の
誤なるべし、かばね也

玉梓之、道爾出立、葦引乃、野行山行、濤、川往涉、鯨名取、海路丹出而、吹風裳、母穗
丹者不吹、立浪裳、驚跡丹者不起、恐耶、神之渡乃、敷浪乃、寄濱邊丹、高山矣、部立丹
置而、訥潭矣、枕丹卷而、占裳無、偃爲公者、母父之、愛子丹裳在將、稚草之、妻裳將有
等、家問跡、家道裳不云、名矣問跡、名谷常不告、誰之言矣、勞鴨、腫浪能、恐海矣、直
涉異將

誤於母穗
上ノハカ

使下ハ
首ノ誤

濤はみなぎらふなど有べき所也、激の誤か、母穗にはの母は於の誤なるべし、元
曆本には母穗を驚跡に作腫は重の誤か、又音を借たるか、さて是は上の玉梓之道
去人者といふと、無音不所聞海爾といふ、二つの長歌の混て一首に成たる也、訥
潭宣長はからすとよまんといへり

反歌

母父裳。妻裳子等裳高高丹。來將跡待。人乃悲

此歌前に出たり

家人乃。將待物矣。煎煎裳無。荒磯矣卷而。偃有公嶋
いへびとの、まつらんものを、つれもなき、わりそをまさて、ふせるさみかも

煎は烈の誤なり

訥。潭。偃爲公矣。今日今日跡。將來跡將待。妻之可奈思母
いりぶちに、こやせるさみを、けふく、と、こんどまつらん、つましかなしも

片淵の淀める所へ、波に打よせられて有をいへり、是もまた前の家人の歌と共
に、玉梓之道行人者云々の長歌の反歌なるべき事前にもいへり

煎烈ノハ
誤

誤烈

汨 浪。來依。濱丹。津煎裳無。偃有公賀。家道不知裳
いるなみの、きよするはまに、つれもなく、こやせるさみが、いへぢしらすも

汨は澳の誤にて、おきつなみか、汨浪といへる例なし、煎は烈の誤也、汨浪宣長は
うらなみとよまんといへり、此歌は鳥音不所聞海爾といふ反歌にて、前の母父も
といへる歌に並べくおぼゆ

右九首

此月者。君將來跡。大舟之。思 憑 而。何時可登。吾待
このつきは、きみさまさんと、おほぶねの、おもひたのみて、いつしかと、わがまち
居者。黄葉之。過 行 跡。玉梓之。使之云者。瑩 成。
をれば、もみぢはの、すぎてゆきぬと、たまづさの、つかひのいへば、はたるなす
髣髴聞而。大士乎。太 穗 跡。立而居而。去方毛不知。朝
はのかにきいて、ますらと、はたとのふと、たちてゐて、ゆくへもしらに、わさ
霧乃。思 惑 而。杖不足。八尺乃嘆。嘆 友。記乎無見跡。
ぎりの、おもひまごひて、つゑたらす、やさかのなげき、なげいとも、しるしをなみと

何所鹿。君之將座跡。天雲乃。行之隨爾。所射完乃。行文將
いづくにか、きみがまさんと、あまぐもの、ゆきのまに、いゆし、の、ゆきもし
死跡。思 友。道之不知者。獨居而。君爾戀爾。哭耳思所
なんと、おもへとも、みちししらねは、ひとりゐて、きみにこふるに、ねのみしな
泣
かゆ

大士乎太穂跡は、大士乎足踏跡の字の誤なるべきか、しからばおはつちをわしみ
か、はりと訓べしと翁の説也、されど猶有べき歎、考べし、杖不足は仲哀紀に、身
長十尺を、みのたけひとつると訓り、もと杖をつるといひし也、天雲の云ふは、天
雲の行に隨ひてといふ也、やさかは長き事にいへり、いゆし、の枕詞、齋明紀に
伊喻之乎つなくかはべのと有、いゆし、はいらる、し、也いゆのゆは、末の句
のなかゆのゆの言にひとし、矢を負たる鹿の、行つかれて死ぬる如く、命かぎり
夫の死し所を見お行んと思へとも道もしらぬと也、旅にて夫の死たるを悲みて
妻のよめる也

反歌

説用ニナ

葦邊往・鴈之翅乎・見 別・公之佩具之・投箭之所思
あしべゆく、かりのつばさを、みることに、きみがおはし、なぐやしおもほゆ

別は人毎といふ事を人別といひ其外某^{ナニ}ごとにを某別といふ別の意也、投箭はなぐるさと同じくたゞ箭の事也、鴈の羽を見るたびに、夫が佩たる矢を思ひ出るといふは、則過にし夫をわすれず悲しむ也

右二首但或云、此短歌者防人妻所作也、然則應^レ知^ニ長歌亦此同作^ニ焉

欲見者・雲井所見。 愛。 十羽能松原。 少子等 率和出

みがはれば、くもるにみゆる、はしきやし、とばのまつばら、わくごども、いさわい
將見。 琴酒者。 國丹放管。 別避者。 宅仁離南。 乾坤之。
でみん、ことさけば、くにさけなん、ことさけば、いへにさけなん、わめつちの
神志恨之。 草 枕。 此羈之氣爾。 妻應離哉
かみしうらめし、くさまくら、このたびのけに、つまさくべしや

雲井もいひて只雲の事也、こゝは邊に見^レすをいふ、井は居の誤なるべし、井はかなければ、爾の辭をしるべきに、爾の字もなければ居と井と同じ事に心得て、後人の書誤れるか、十羽の松原、此地名かたぐいに有れば、いづくともかた

説使便ニナ

し、わく子ともといふは、夫のかたみと思へる稚兒等をいさなふ意也、率和神武紀伊非和^ニと有て、いさといふ事也、出將見の下句の落たるなるべし、ことさけば、殊^ニさら^ニに吾を避け離んとならば、國を立はとにこそ離るべきに、化國の任^ニに^ニあて^ニ來^ニて、避るよと恨めり、此さくるといふは死別也、旅の氣の氣は、月日といはんが如し、卷七殊さけば奥ゆさけなんみなとより邊つかふ時にさくべきものかとも有、宣長云欲見の欲は誤にて、放ち、みさくればと有べしといへり

反歌

草 枕。 此羈之氣爾。 妻 放。 家 道 思。 生爲便無
くさまくら、このたびのけに、つまさかり、いへちおもへば、いけるすべなし

或本歌曰、羈乃氣二爲而

長歌のつまさくべしやは、女の我うへをいひ、反歌のつまさかりは、夫をいへり、字に泥むことなかれ、長歌に欲見者といへるは、こゝの松原のけしきわが故郷ふ似たればしかいへるか、是は國任なるべきに、其人死れば、妻子は歸さるゝ事なるを、かくて在は、遠き任にて、さるべき便待間の歎なるべし、卷九筑波山の歌

お、新治乃鳥羽能淡海とよければ、此歌の十羽もそこにや、しからば常陸などの任
なりしも知へからず

右二首

萬葉集卷第十三畢

萬葉集卷十四

東歌

上総國雜歌一首○下総國雜歌一首○常陸國雜歌二首○
 信濃國雜歌一首○遠江國相聞往來歌二首○駿河國相聞
 往來歌五首○伊豆國相聞往來歌一首○相摸國相聞往來
 歌十二首○武藏國相聞往來歌九首○上総國相聞往來歌
 二首○下総國相聞往來歌四首○常陸國相聞往來歌十首
 ○信濃國相聞往來歌四首○上野國相聞往來歌二十二首
 ○下野國相聞往來歌二首陸奥國相聞往來歌三首○遠江
 國譬喻歌一首○駿河國譬喻歌一首○相摸國譬喻歌三首
 ○上野國譬喻歌三首○陸奥國譬喻歌一首○未勘國雜歌
 十七首○未勘國相聞往來歌百十二首○未勘國防人歌五
 首○未勘國譬喻歌五首○未勘國挽歌一首

東歌

此次に雜歌相聞、あるひは上總國歌なども標あるは、皆後人の註なるべきよし
考に有、しかれども有がまゝにこゝにはしるせり

奈都素妣久・宇奈加美我多能・於伎都渚爾・布禰波等杼米牟・佐欲
なつそびく、うなかみかたの、おきつすに、ふねはとゝめん、さよ
布氣爾家里
ふけにけり

なつそびく枕詞、和名抄上總海上郡字奈加美、卷七に本全同じき歌有、こゝに載たる五
首の中、初二首と末一首は東よりならず、既に久しく什奉て歸りたる人の東にて
の歌故に是に入たるか、あるひは京人の東の國の司などにて下りたるがよめる
を、それも其國に傳はりたるは、其國の歌とて有なるべし、古今集の東歌にも此
類あり

右一首上總國歌

可豆思加乃・麻萬能宇良末乎・許具布禰能・布奈妣等佐和久・奈美
かづしかの、まゝのうらまを、こぐふねの、ふなびとさわぐ、なみ

多都良思母

たつらしも

葛野郡真間は今も聞えたり、うらまは既に山、卷七風早の三はの浦まをこぐ舟の舟人さわぐ浪立らしもと、いふに似たり、かつしかはえつを濁て唱しならん

右一首下總歌

筑波禰乃・爾比具波麻欲能・伎奴波安禮杆・伎美我美家思志・安夜つくはねの、にひぐはまよの、さぬはわれど、さみがみけし、わや爾伎保思母にさはしも

和名抄桑爾唐韵云據和名久桑爾即桑爾也と有、新羅の指を専らとす、古事記奴婆多ヌハタ麻能久路岐美那斯遠といひ、此集には御衣をみけしと訓り、わやには上に多出たり、さはしとは、古は男女の衣を互にかして着せしむれば、なつかしき君が衣を着まはしといふともすべけれど、猶ともねして重ね着ん事をいふなるべしと翁の説也、宣長云、是は京より下り居る官人などの衣服の美さをみてよめるなるべし、上句のさましか開ゆと云りこれも然るべし

或本歌曰、多良知禰能、又云安麻多伎保思母

是は誤りたるもの也、母といはずして、たらちねとのみいふ事、古くはすべてなし

筑波禰爾・由伎可母布良留・伊奈乎可母・加奈思吉兒呂我・爾努保つくはねに、ゆきかもふらる、いなをかも、かなしきころが、にぬはさ佐流可母るかも

ふらる所はふれるの東語、いなをかもは、否よ、しかはわらぬか也、かなしきは愛くカウしむ意也、にぬは布也、はさるははせるの東語也、本は雪なる、を布と見なしてよめり、常陸よりは曝布の調奉る事續紀にみゆ、しかればはく見なれし物ふたとへたる也

右二首常陸國歌

信濃奈流・須我能安良能爾・保登等藝須・奈久許惠伎氣婆・登伎須しなぬなる、すがのわらのに、はとゝぎす、なくこゑさけば、とさす

疑爾家里

ぎにけり

和名抄信濃筑摩郡芋賀ツツガといへる有是ならん。旅に在てとく歸らん事をおもふ
ハ、郭公の時まで猶在を愁たる意も、歌の調も京人の任などにてよめりけん、又
相聞の方にもとらばとりてん

右一音信濃國歌

相聞

かく相聞譬喩など標せば、右五首の初めにも、雜歌と有べきに、たゞ東歌と標し
て擧、次の國所不知と左に註せし歌ともにも、相聞譬喩古挽歌などの標あれど、
其標に違ひたる歌とも多く交りて有ば、標は後の註なるべきよし考にいはれた
り

阿良多麻能・伎倍乃波也之爾・奈乎多氏天・由吉可都麻思自・移乎

あらたまの、さべのはやしに、なをたて、ゆきがつましも、いを

佐伎太多尼

さきだいに

誤目自

遠江鹿玉郡、卷十一瓊之寸戸が竹垣と云もこゝ也、そこに委しくいへり、なをたて
いは汝を立待しめて也、ゆきがつましもは雪が積りし也、自は目の誤也、もは助
辭、今本自と書て、つましくと訓るは誤也、自を清音に用ひたる事なければ也、い
をさきだいにには、寢を先立ね也、尼は彌に通はしいふ東言か、卷廿東歌につくは
ねを都久波尼と書しかば、尼も即稱のかなとせしにも有べし、歌の意は、男の來
て、伎倍の林に立待と告しに、女はいまだ母のゆるさねば、國へ入がたき間に雪
のふれば、其林に積らんには堪じ、吾より先立て國へ入ふして待給へといひやれ
る也と翁の説也、されどすべといふは眠る方にいひて、臥事をいといはざれ
ば此説いかにぞや、宣長云、これは男の旅立行時妻の伎倍の林迄送來ぬるを、別
る、時の男の歌也、さへの林に汝を立とまらせ置て、別れ行吾はえ行やらじ、汝
も立とまらずして、さき立てゆけかし、吾もともにゆかんといへる也、ゆきがつ
ましもは行がてましも也といへり、さていせ人稻掛大平が説に移乎は移毛の誤
なるべしといへり、かくてはいとねたやかにさこゆ

伎倍比等乃・萬太良夫須麻爾・和多佐波太・伊利奈麻之母乃・伊毛

さべびとの、まだらぶすまに、わたさはに、いりなましもの、いも

誤利利誤附太波
ニチノハド

我乎杼許爾

がをどこに

伎倍人は伎倍の里人也、ふすまは御妹が夜の衾を云、斑衾は斑摺か、又倭文にて筋有布をもいふべしわたさには誰多に也、波の下太は爾の誤なるべし妹が右のごとく告しまゝに、男閨へ入てねしかど、獨ねて待はど、猶寒さ堪がたければ、衾に綿多く入ん物をといひて、さて三句までを入といはん序として、どく閨へ入なまし物を、林に立待わびしとよめる也、を床のをは發語也と翁の説也、又上はたゝ入といはんのみの序にて、右の答には非ともすべし

右二首遠江國歌

安麻乃波良・不自能之婆夜麻・已能久禮能・等伎由都利奈波・阿波
わまのはら、ふじのしばやま、このくれの、とさゆつりなば、あは
受可母安良牟
すかもあらん

天の原は高きをいふ、しば山は麓は柴のみ繁ければいへりこの、くれは木之暗也
さしものふじの麓なれば道も遠く、柴のこぐらさ夜道をたどるに、夜更なば、妹

が待時の違ひて、逢がたくやあらんと、心をやりていそぐさま也、宣長云、上二句
はこのくれの序のみ也、木之暗を此暮にいひかけたる也といへり、ゆつりは移り
也、卷四松のはに月は由移去云々

不盡能爾乃・伊夜等保奈我伎・夜麻治乎毛・伊母我理登倍婆・氣爾
ふじのねの、いやとほながさ、やまぢをも、いもがりとへば、けに
餘婆受吉奴
よはすさぬ

彌遠長き山路をも也、とへばといへば也、氣は息也、爾餘婆受は不三呻吟一也山
路につかれては、息づきうめく物なるを、妹が許へ行と思へば、安く來りつとい
ふ也、宣長云、けはけ長きのけにて、來經也、さればこは時刻を移さずいそぎて來
ぬと云也、よばすは不及也といへり、猶考べし

可須美爲流・布時能夜麻備爾・和我伎奈婆・伊豆知武吉氏加・伊毛
かすみゐる、ふじのやまびに、わがきなば、いつちむきてか、いも
我奈氣可牟
がなげかん

霞居る也、山備は山方也、いつちは何道也、男はふじの麓へ別れて來居る事ある時、しか別れば、ふじは雲霞の立事常なれば、方もしられずして、吾方を見んにも、何方に向てかなげかんと也、古へ雲霧霞を相通していへば霞といふも時はさすべからず

佐奴良久波・多麻乃緒婆可里・古布良久波・布自能多可禰乃・奈流
さぬらくは、たまのをばかり、こふらくは、ふじのたかねのなる

佐波能其登
さはのこど

さは發語、良久は留の延言にて、寝るは也、玉の緒は長きにも短きにもどれり、こは、短きをぬる間のすくなきにとる、末は鳴澤の鳴りといろくを、おもひのつき返るにたとふる也、ふじの鳴澤は、嶺上に穴有て、昔は水有火有て相たゝかふに、涌連る音高かりしといへり、延暦十二年又貞觀の比にも甚焼て後火ものぼらず、水も湛へねば、涌るもなく、烟も絶て、其後寶永には山の半へ焼出たり

或本歌曰、麻可奈思美、奴良久波思家良久、奈良久波、伊豆能多可禰能、奈流左波奈須與

阿波夜

阿波夜

奴良久の下波一本になく、奈良久の上一本佐の字有、此歌は右の歌を誤傳へたるものにて解べからず

一本歌曰、阿波良久波、多麻能乎思家也、古布良久波、布自乃多可禰爾、布流由伎奈須毛

しけは次也、及也玉の緒の如くといふに同じ、末はとこしへに絶る事無を譬たり、宣長云、しけやはしきやの意にて、玉のをらしきの意なるべしといへり

駿河能字美・於思做爾於布流・波麻都豆夜・伊麻思乎多能美・波播
するがのうみ、おしべにおふる、はまつら、いましをたのみ、は

爾多我比奴 一云於夜爾多我比奴
にたがひぬ

或説いそべを東言におしべといふ、下の真間の於須比爾なみもといろにといへるも、磯邊をいふといへるはしか有べし、出雲風土記に、波都豆良毛毛夜夜爾といへる如く、廣くはひたるかづら也、いづれといふ名は定めがたし、さて其濱つゝらの如く、長く絶ず頼みわたりて、母がこどひとにあはせんといふをうけひかずして、心に背けるといふ也、いましは汝也

右五首駿河國歌

伊豆乃宇美爾。多都思良奈美能。安里都追毛。都藝奈牟毛能乎。美
いづのうみに、たつしらなみの、ありつゝも、つきなんものを、み
太禮志米梅揚
だれしめゝや

波は常に立よる物なれば、在ふる事に譬て、ながらへ在て逢なんものを、よし事
有とも、心を亂らさめや也、宣長云結句みだれ初めゝやならん、末長く繼なんも
のを、はや今より亂れそめんや也、亂るゝは心の定まらぬをいふといへり、猶考
べし

或本歌曰、之良久毛能、多延都追母、都我牟等母倍也、美太禮曾米家武

いづのうみにたつしらくもの也、もへやはおもへばにや也、今みだれて絶ゆと
も、又つがむと思へばにやみだれそめけん也

右一首伊豆國歌

安思我良能。乎氏毛許乃母爾。佐須和奈乃。可奈流麻之豆美。許呂
わしがらの、をてもこのもに、さすわなの、かなるましつみ、ころ

安禮比毛等久
われひもとく

相模の足柄山をいふ、をてもこのもは彼面此面を轉じいふ、さすわなは鳥獸をと
る羅をさし作る也、神武紀辭藝和奈破慮と云に同じ、是はこはせといふ物をもて
あやつりおくに、獸の觸るれば、急にこはせの繼れて、そのわなにかゝる、其はつ
るゝ間の、疾さをいとしばしあふに譬、かなるまは羅のこはせのはづるゝ間を、
かなぐる間といふを略きて、かなるまといへり、卷廿防人歌にあらしをのいを
箭たばさみ立向ひ可奈流麻之豆美いで、ぞわがくるといふもひとし、しづみは
其間を詳めてにて、いと暫のひまを竊也、ころわれひもとくは、子等と吾共に紐
解と也と翁の説也、宣長云、四の句はたゞさるゝしづみの類にて俗に鳴りをし
づめてといふ意と聞ゆといへり、猶考べし

相模爾乃。乎美爾見所久思。和須禮久流。伊毛我名欲妣氏。吾乎爾
さがみねの、をみねみそぐし、わすれくる、いもがなよびて、あをね
之奈久奈
しなくな

今大山とて、雨降神社の在山なるべし、をみねは重ねいひて調べのあやとする也、乎は發語、をつくはなどの如し、みそぐしは見過しにて、遠く來つるよしをいふのみ、ねしなくなは、音に泣かしむるな也、なくのくはかすの約也、意は遠く來て思れつるを、從ふ人など妹が名をいひて、我に泣かしむる事なかれといふ也
或本歌曰、武藏禰乃、乎美禰見可久思、和須禮遊久、伎美我名可氣氏、安乎禰思奈久流、これは秩父山をいふなるべし、をみねみかくしは、遠く來ては隱るゝ也、君とは専ら男をさす事なれど、女を君といへる例も有、かけては言にかけていふ也、ねしなくるはねに泣かする也

和我世古手・夜麻登徹夜利氏・麻都之太須・安思我良夜麻乃・須疑
わがせこそ、やまとへやりて、まつしたす、あしがらやまの、すぎ
乃木能末可
のこのまか

衛士などに上り居る人の妻の歌ならん、契沖云、まつしたすはまふしたつ也、文選柱、翳と有、鳥獸をかるもの、まふしさしてうかふととく、杉の木の間より、今や歸ると見る也といへり、さらば都は部の誤か、猶考べし、此山には古へ杉

の大木多ければ、船につくり、今も埋れ杉とてぼり出せり

安思我良熊・波姑禰乃夜麻爾・安波麻吉氏・實登波奈禮留乎・阿波
あしがらの、はこねのやまに、あはまさて、みとはなれるを、あは
奈久毛安夜思
なくもわやし

實なれるを事の成ぬるに譬て、しかるをいかでわはぬにかといふ意なり、上は譬のみ

或本歌末句云、波布久受能、比可利與利已禰、思多奈保那保爾

是は三の句以下右と異にて、或本といふべくもわらずひよりこねば引れより來ねか、又利官本波に作る、ひかばよりこねとあればいよ、おだやか也、一たなばくには、卷五久かたの天ちは遠し奈保く爾家に歸りてなりをしまさにといふと同意にて、こ、はつるのもつれ亂るゝ事なく、たやすくよりくるにたとへて、心の彼是と思ふ事なくて、おだやかによりくるを云り

可麻久良乃・美胡之能佐吉能・伊波久叡乃・伎美我久由倍伎・已許
かまくらの、みこしのさきの、いはくえの、きみがくゆべき、こ、

呂波母多自
ろはもたじ

和名抄鎌倉郡鎌倉郷あり、仁徳紀以播磨娜輪仰之古俱等望、又卷三妹も吾も清みの河の河岸の妹かくゆべき心はもたじとよめり、山或川岸などの岩の崩るゝ所をいふ、上は序にて、君に悔やましむべき心はなしと云也

麻可奈思美・佐禰爾和波由久・可麻久良能・美奈能瀬河泊余・思保
まがなしみ、さねにわはゆく かまぐらの、みなのせがはに、しほ

美都奈武賀
みつなんか

麻は真かなしみは愛る也、佐は發語、寢に行也、常は水乾て、潮満時は高波の立川そこに今も有其川を渡り行んに潮満なんかと也、みつなんかはみちなんを轉といへる東語也、又らんをなんといへる事東歌に例われればこゝもらんか

母毛豆思麻・安之我良乎夫禰・安流吉於保美・目許曾可流良米・巳
もいづしま、あしがらをふね、あるさおほみ、めこそかるらめ、こ

余ハ
誤

許呂波毛倍村
いろはもへと

百津島はあるさ多みといはん料也、あしがらを舟は、足柄山の杉もて造る船也、相摸の足柄郡と、伊豆國は山續きて分ちがたき故に、伊豆手船足柄を船も異ならぬなるべし、應神紀五年十月科伊豆國一令造船、長十丈、船既成之、試浮于海、便輕泛疾行如馳、故名其船曰枯野と有、男の心にはおもへとも、かたかたによし有てわりく故に、相見るとの疎く成ぬるをよめる也、宣長云目こそかるれといふべきを、かるらめといへるは、すべてかやうのめは、見えといふ意にて、其見えはあなたへ見ゆるなれば、女の方にて見えこそかるらめ也といへり

阿之我利能・刀比能可布知爾・伊豆流湯能・余爾母多欲良爾・故呂
あしがりの、とひのかふらに、いづるゆの、よにもたよらに、ころ
何伊波奈久爾
がいはなくに

あしがりは足柄也、足柄下郡の土肥の杉山なといひて、伊豆に交れる所に合湯河原といふ村に湯有、古への湯ならん、よにもは代にもなる事上にいへり、ころ

は子等にて妹をいふ、たよら云は、絶ん如くはいはざりしに也、是は妹が今更
にわはぬを疑ふなるべし、此下にも筑波ねの岩もとろに落る水よにもたゆら
にとよめり、宣長云、たよらたゆらとも絶の意にあらずして、俗言に丈夫にと
いふ意也、上よりのつゝきは、湯のじやうふに多き意、歌の意はあやふからずじ
やうふにたしかなる意也、妹が丈夫にはいはぬをあやふめる也といへり、猶考べ
し

阿之我利乃・麻萬能古須氣乃・須我麻久良・安是加麻可左武・許呂
あしがりの、まゝのこすげの、すがまくら、あせかまかさん、ころ、
勢多麻久良
せたまくら

足柄郡のまゝ下の郷といふは、足柄の竹下といふ所の下にて、酒匂川の上にあ
り、此小菅は水に生る菅也、あせは何ぞといふ東言也、まかさんは枕せん也、ころ
せたまくらとは、兒等と夫は共に手枕を交すからは、菅枕は何ぞやまかんどいふ
也

豆
字
文

安思我里乃・波故爾能爾呂乃・爾古具佐能・波奈都豆麻奈禮也・比
あしがりの、はこねのねろの、にこぐさの、はなづまなれや、ひ

母登可受禰牟
もとかすねん

ねろの呂は助辭也、卷十一蘆垣の中の似兒草にこよもにとよめるによるに、こ
に花妻とつゞけしも、面よくゑみて實ならぬに譬るなるべし、官本豆の字なし、
なれやはなりやはの意也、すべて實なき事を花といへば、花妻ならぬからは紐解
べしといふ也

安思我良乃・美佐可加思古美・久毛利欲能・阿我志多婆倍乎・許知
あしがらの、みさかかしこみ、くもりよの、あがしたばへを、こち
氏都流可毛
でつるかも

くもりよの枕詞ならんと翫いはれき、されどこは心得がたし、按にこもりぬのと
有しを訛傳たるか、久は已、欲は奴の誤字なるべし、卷九隱沼乃下延置而どあり、
こゝもあがは吾にて、したばへは卷九なるに同じく、したとはしのび隠して物す
るをいひ、はへは女を思ひかけて妻問する事をいへり、こちでつるかもは言に出
しつる也、足柄の山路は逢人もなく、すゝろにかしこまゝに、頻に妹戀しくお

ほえて、常は心にのみおもひて言に出さざりし妹が名を、おぼえすいひ出せしと云也、卷十五かしてみとのらす有しを三趣路のたむけに立て妹が名のりつともよめり、古事記に倭武命到足柄之坂本云登其坂三歎詔云阿豆麻波夜ともわり

相模治乃。余呂伎能波麻乃。麻奈胡奈須。兒良久可奈之久。於毛波さかみちの、よろぎのはまの、まなごなす、こらくかなしく、おもは

流留可毛

る、かも

和名抄餘綾郡餘綾^{與呂}今の大磯驛の東うらのあたり也、兒良久の久元曆本波に作れとも、是も誤にて之の誤なるべし、こらしと有べし、かなしは愛の深き也、此いその真砂のうるはしきが如くかなしとおもふ也

右十二首相模國歌

多麻河泊爾。左良須氏豆久利。佐良佐良爾。奈仁曾許能兒乃。已許たまがはに、さらすてづくり、さらくは、なにぞこのこの、あ

太可奈之伎
だかなしき

武藏多麻郡の多麻川也、上は序にして手づくりは和名抄白絲布^{天都久利乃奴乃}と有、卷十六うつたへはへて織布日ざらしのあさ手作をとよみて、是は業として織にもあらず、私の料に織をいふべし、今手織といふ也、末は何とてか此妹を殊更にうつくしみ思ふ事の多きかとみづからいふかる也

武藏野爾。宇良敝可多也伎。麻左氏爾毛。乃良奴伎美我名。宇良爾

むさしぬに、うらへかたやき、まさでにも、のらぬきみがな、うらに

低爾家里

でにけり

古事記に内^{ウチノキニ}援天香山之眞男鹿之肩^{マコトノカ}援云と有て、こは武藏野の鹿の肩骨を取て焼占なふ故にかくいへり、うらへは占^{ウラヘ}令^{アサヒ}合の意也、へをえの如くよ、まごでに、は、眞定にも也、此末にからすとよ大をそ鳥の麻佐低爾毛とより、思ふ男の名を我は眞定に告し事も無に、父母のいふかりて、占へ肩焼して占に照れたりと也、鹿骨を焼は、わが古への占の法なりしを、奈良宮に至りて絶しにや、東國

の神社の中には、今も鹿占の有を得て、東まろ翁のもたりしは、骨の斑にこがし
たる也とぞ

武藏野乃。乎具奇我吉藝志。多知和可禮。伊爾之與比欲利。世呂爾
むさしぬの、をぐさがきいし、たちわかれ、いにしよひより、せろに

安波奈布與
あはなふよ

をぐさは小軸也、くきの事既にいへり、此野のをぐさといふべき所は秩父山の方
へよりて有べし、雉は立といはん序のみ、せろのろは助辭、あはなふはあはぬと
いふを延たり、よはいひ押ふる辭にして、歎く意を含めり

古非思家波。素世毛布良武乎。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。伊呂
こひしけば、そでもふらんを、むさしぬの、うけらがはなの、いろ

爾豆奈由米
にづなゆめ

戀しくあらば也、二三の句は句中の序也、字鏡白朮字介和名抄朮、似字介似、前生字介、山中

一故名「山朮」と有、此花白も又白きに紫を帯たるも有、此紫朮を色に出とよぎる
ならん、末句は謹て色に出る事なかれといふ也、さて戀しき時は吾はよそ人を思
ふ如くして、袖振事も有んを、それを見て、心には思ふとも、色に顯はす事なかれ
と也、女の歌にて、次のは男の答と見ゆ

或本歌曰、伊可爾思底、古非波可伊毛爾、武藏野乃、宇家良我波奈乃、伊呂爾底受安
良牟ラヌ

是は異歌也、或本とて註にせるは誤なるべし、いかにして戀せばか、色に出ず有
べきと也、字はらとも手けらともいふは、うさぎを手さきともいふが如し

武藏野乃。久佐波母呂武吉。可毛可久母。伎美我麻爾末爾。吾者余
むさしぬの、くさげもろむき、かもかくも、さみがまに、わはよ

利爾思乎
りにしを

此大野に風靜かに吹て、草葉のもろともになびくさま也、上に秋の田の穂むきの
よれる片よりといへるが如し、かもかくもは彼も此も也と翁の説也、宣長云、もろ
むきはななたへもこなたへもなびく事也、左右手をもろ手といふもの也、さてか

もかくもといふ也、一首の意は、かにもかくにも君がまゝにぞ思てよりにし物を
今更何の仔細かわらんと也といへり、是然るべし、上は序のみ

伊利麻治能。於保屋我波良能。伊波爲都良。比可婆奴流奴流。和爾
いりまぢの、おはやがはらの、いはるづら、ひかばぬるく、わに

奈多要曾禰

なたえそね

和名抄入間郡大家於保也と有是ならん、いはぬつら下にかはやが沼のいはるづらと
よみたれは、水中のものか、ぬるくは上に多氣はぬ禮といふ歌にいへる如く、
かづらの長くつゞけるを引けば、ぬらくとして絶ざるを、男の吾に絶ざらんに
等、曾禰は令する辭也

和我世故手。安村可母伊波武。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。登吉
わがせこそ、あどかもいはん、むさしぬの、うけらがはなの、とさ

奈伎母能手

なきものを

初句の手は與と云意也、あどかもは、何とかもにて、戀しさはたとへいはん方も
なきの意也、さてうけらが花のは時といふへかゝるのみ也、なきまでへはかゝら
ず、布留のわさ田の穂には不出の類ひ也

佐吉多萬能。津爾乎流布禰乃。可是乎伊多美。都奈波多由登毛。許
さきたまの、つにをるふねの、かせをいたみ、つなはたゆとも、こ

登奈多延曾禰

となたえそね

埼玉郡は海によらず、利禰の大川の船津をいふなるべし、たとひ風はげしくて、
船綱は絶とも、言絶るとなかれといふ也

奈都蘇妣久。宇奈比乎左之氏。等夫登利乃。伊多良武等曾與。阿我
なつそびく、うなびをさして、とぶとりの、いたらんとぞよ、わが

之多波倍思

したばへし

なつそびく枕詞、播磨にうなひといふ地有が如く、此宇奈比も地名なるべし、此
條皆地名をいへる中なれば也、鳥は心ざす方有て飛ものにて、其方へ玉らざる事

なし、是に譬て、吾も終にかく逢へる物とて、かくしたはへしと也、したはへは上にわがしたはへをこちでつるかもとよめるに同じ

右九首武藏國歌

宇麻具多能。彌呂能佐左葉能。都由思母能。奴禮氏和伎奈婆。汝者
うまぐたの、ねろのささばの、つゆしもの、ぬれてわきなば、なは
故布婆曾母
こふばども

和名抄望多郡末字と有は後の音便也、古は馬來田と書て、訓も此歌の如く紀などに見ゆ、ねろは嶺等也、露霜爾といはで、能といへるは、露霜にぬれてといふにあらずさ、葉に露霜の置たる如くぬれての意也と宣長いへり、未は袖も裾もぬれしをれて、吾來る事は、汝をば深く戀ればぞといふ意にて、わがさぬるは、なを、といふべきを、東言にかくいへるか

宇麻具多能。彌呂爾可久里爲。可久太爾毛。久爾乃登保可婆。奈我
うまぐたの、ねろにかくりる、かくたにも、くにのとほかば、なが

目保里勢牟
めほりせん

防人の出立て、此嶺の彼方に成しほをいふ、今此一嶺に隠る、斗近きにだにも戀しさに、いや遠ざかり、國へたよりゆかば、いか斗妹を相見まくはしからんと也、ながは汝が也

右二首上總國歌

可都思加能。麻末能手兒奈乎。麻許登可聞。和禮爾余須等布。麻末
かつしかの、まゝのてこなを、まともか、われによすとふ、まゝ
乃氏胡奈乎
のてこなを

和名抄葛飾志加とあれど、今東にてかつしかといふがかへりて古き也、手兒奈の事は既にいへり、さて歌の意は、てこなが吾に逢べしと人のいひ寄るといふはまとかといふ也、卷三卷九に、此手兒奈をよめるは、奈良の朝に至り、天平の始の比の歌なるを、其歌に古しへに在けんなどいひしからは、此少女は飛鳥岡本の宮の比に在しなるべし、この歌の様も其比の歌と聞ゆるよし翁はいはれき、宣長云

此歌の意は古への真間の手をなを、吾によそへて似たりと人のいふと云はまことかと悦べる女の歌也、されば此手となの在世の歌にはあらずといへり、猶考べし

可豆思賀能。麻萬能手兒奈家。安里之可婆。麻末乃於須比爾。奈美
かづしかの、まゝのてをなが、ありしかば、まゝのおすひに、なみ
毛登杼呂爾
もとゝろに

家一本我に作るお随ふべし、おすひは上の駿河歌の於思敵オモトと同じく、磯邊といふ事と聞ゆてをながうるはしさに、いひさわきし事を所につけて波もたど、是は既にみまにし後の歌也と翁の説也、宣長は手をなが磯べに在しかば、浪さへめでいさわきしといふ意ならんといへり、猶考べし

爾保杼里能。可豆思加和世乎。爾倍須登毛。曾能可奈之伎乎。刀爾
にはどりの、かづしかわせを、にへすとも、そのかなしさを、とあ
多氏米也母
たてめやも

にはどりの枕詞、早稻を以神に新管奉る也、公は本よりにて、田舎の民戸にても此祭せしなるべし、此神事には凡の人の入來るをも忌ども、深くうつくしと思ふ君が來んには、戸の外には立せず、内へ入來させむと、事のたどへにいへり、そのかきしきは、其かなしと思ふ君といふを畧さいへる也、下にたれぞ此屋の戸おそふる爾布奈未ニフナミにわがせをやりていはふ此戸をともよめり

安能於登世受。由可牟古馬母我。可都思加乃。麻末乃都藝波思。夜
あのおとせず、ゆかんとまもが、かづしかの、まゝのつきはし、や
麻受可欲波牟
ますかよはん

足の音せず也、川の狭きには板一ひらうち渡して足れども、少し廣きには川中に柱をむかへ立てり、それに横木をゆひて、板を長く繼て渡すを繼橋といふめり、其橋をわたりて忍ひて妹がり行んに、足音せず渡らん事も、がなと願ふ也

右四首下總國歌

筑波禰乃。禰呂爾可須美爲。須宜可提爾。伊伎豆久伎美乎。爲禰氏
つくはねの、ねろにかすみゐる、すぎがてに、いきづくきみを、ぬねて

夜長佐禰

やらさね

此嶺は常にかゝれる雲霞のよそにも過ゆか有を、男の忍ひ來たるに得逢がたきを思ひ過しがたくするにたとふ、いきづくは思餘りて息を衝也。やらさねは卷一草をからさねといふ如く、ゐねてやれと作より令する様にいひて實は自願ふと也。此下のきはづくの岡のくゝみら香つめを籠にもみたなふせなど都麻佐稱といふも我事をいへり、しかればこゝは母なとの目を忍びかねて、男をたいに歸らしむる時の心を、みづからいふとすべし、爲ねては率る寝て也と翁の説也。宣長云過がては、やらさねといふに合せて思ふに女の家のおたりに行過がたくする也、又過がてを思ひ過しがたき意とする時は、やらさねは其心をはらしやらさね也といへり、此下にもかみつけぬいかはのねろにふるよきの遊吉須宜可提奴いもがいへのあたりと有をもおもへば、女の家のおたりに行過がたくする意とせんかたまさるべし

伊毛我可度・伊夜等保曾吉奴・都久波夜麻・可久禰奴保刀爾・蘇提

いもがかと、いやとはぞきぬ、つくはやま、かくれぬはとに、そで

婆布利氏奈
はふりてな

とはぞきは遠放也、ふりてなはふりてん也、防人の立行道にてよめるか

筑波禰爾・可加奈久和之能・禰乃未乎可・奈岐和多呈南牟・安布登

つくはねに、かゝなくわしの、ねのみをか、なさわたりなん、あふと

波奈思爾

はなしに

鷲の聲は我久々ガと聞ゆるやうに鳴ものなればかゝなくといふ、景行紀に相摸海にて覺駕鳥ガの聲せしといふ事有、其覺賀はこゝを以侮字書とせん、和名抄嚇ガ奈久と有、上は泣といはん料にいへるのみ

筑波禰爾・我我比爾美由流・安之保夜麻・安志可流登我毛・左禰見延

つくはねの、そがひにみゆる、あしはやま、あしかるとがも、さねみえ

奈久爾

なくに

そがひは背向也、あしは山は下野國にて、筑波よりは北、二荒山の山つゞき也、上はあしといはん序にて、心は其男は姿も心も悪といふべきとがも見えざる故心につけるよしを女のよめるなるべし、集中事なきわきもなといへるもはめいふ也、末の爾はいひ入れて歎く詞、例多し

筑波禰乃・伊波毛第村呂爾・於都流美豆・代爾毛多由良爾・和家於つくはねの、いはもとゝるに、おつるみづ、よにもたゆらに、わがお

毛波奈久爾もはななくに

おつる水は則瀧也、其瀧のごとく代々にも絶んとはおもはぬと也と翁の説也、宣長云たゆらは上よりのつゞきは多き意、歌の意は男の心をわやぶみて、たしかには頼みがたくおもふ也といへり、上によにも多欲良爾とよみて、其所にもいひつ、家古本我に作るをよしとす

筑波禰乃・乎氏毛許能母爾・毛利徹須惠・波播己毛禮村母・多麻曾つくはねの、とてもこのもに、もりべすゑ、は、こもれども、たまぞ

誤敵般ニテ

阿比爾家留あひにける

とてもこのも上に出、もりべは守部にて山守也、四の句母籠れどもといふもおだやかならず、又子守れどもとみづからいふべきにあらず、巳は可の誤にて、は、がもれどもならんか、或人は巳は巴の誤にて、は、はかといへるよし宣長いへり、かくては穩か也上は母が守警おとれり、卷十二靈合へばあひぬる物を小山田のし、田もること母し守らすも有に似たり

左其呂毛能・乎豆久波禰呂能・夜麻乃佐吉・和須良延許波古曾・那さどろもの、をつくはねろの、やまのさき、ぬすらえこばこそ、な

乎可家奈波賣をかけなはめ

さ衣の枕詞、山のさきは和名抄岬山側也云々、日本紀私記云^{三左}なをかけなはめは汝を懸る事なからめ也、宣長云是はつくは山のさきを今通り行時によめるにて、妹が事を思れて來たらばこそかけさらめ、思れがたき故にかけてしのぶぞといふ也、かくるは言にかけていひつる也、來ばこそといへると、山のさきとい

波太爾ノ下

へるとに心を付べしといへり、是穩か也

乎豆久波乃・爾呂爾都久多思・安比太欲波・佐波太奈利努乎・萬多
をつくはの、ねろにつくだし、あひだよは、さはたなりぬを、また
爾天武可聞
ねてんかも

つくだしは月立也、初月を云、あひだよは、間夜者也、佐波太の太は爾の誤にて、
さはになるべし、此嶺に初月の見えし比逢て後、間だの夜ごろの多くなればいか
いあらん、絶やせん、又逢事のあらんかとあやぶめる意也

乎都久波乃・之氣吉許能麻欲・多都登利能・自由可汝乎見牟・左爾
をつくはの、しげきこのまよ、たつとりの、めゆかなをみん、さね
射良奈久爾
さらなくに

冠辭考味さはふの條に有如く、立鳥の群とつゞけたり、年禮の約米也、さて上の
句はめといはん序にて、其序の詞よりはむれとつゞき、うけたる句にては、たゞ

目にのみ見てあらんかといふ也、さねさらなくにのさは發語、卷十五おもはずも
まことを得んやさぬる夜のいめにも妹が美延射良奈久爾とよめるも見えざるに
の意なれば、こゝもさねさらなくにといひて、ねざるにの意となる也、卷三草枕
云々家待莫國とある莫を眞の誤として、いへまたまくと訓るは中々にわろけ
れば、本のまゝにていへまたなくにと訓り、其所に宣長が説を擧てくはしくいひ
つ

比多知奈流・奈左可能宇美乃・多麻毛許曾・比氣波多延須禮・阿村
ひたちきる、なさかのうみの、たまもこそ、ひけばたえすれ、あど
可多延世武
かたえせん

なごかの海土人に問べし、あどかはなごか也、玉藻は引けば絶れども、吾中は何
ぞ絶んといふ也

右十首常陸國歌

比等未奈乃・許等波多由登毛・波爾思奈能・伊思井乃手兒我・許登
ひとみなの、ことはたゆども、はにしなの、いしゐのてどが、ごと

奈多延會禰
なたえそね

許等は言也、埴科郡の石井といふ里の名ならん、てこは上にいへり、なべての人の言は絶とも、石ゐるの手見が許よりの言は絶る事なからなんと男のよめる也

信濃道者。伊麻能波里美知。可里婆禰爾。安思布麻之牟奈。久都波
しなぬぢは、いまのはりみち、かりばねに、あしふましむな、くつは

氣和我世
けわがせ

續紀和銅六年美濃信濃二國之堺經道險阻一往還艱難仍通吉蘇路とみゆ此は道の事故に今の墾道といへる時代かなへり、且新たに墾る道には、木竹を刈除たる其切株の有を踏て、足害ふなどいへり、かりばねは刈れる根をいふべし、古事記に小竹之刈材雖足踏破云々、くつはけわがせは、沓著吾夫也、此新ばりの道を經て通ふ男もたる女のうた也

修濃奈流。知具麻能河泊能。左射禮之母。伎彌之布美氏婆。多麻等
しなぬなる、ちぐまのかはの、さゝれしも、さみしふみてば、たまご

比呂波牟
ひろはん

此川本筑摩郡に在べし、今は他郡に此川の名有とぞ、さゝれしはさゝれいし也、ふみてば、踏てあらばを約いふ例也

中麻奈爾。宇伎乎流布禰能。許藝氏奈婆。安布許等可多思。家布爾
なかまなに、うきをるふねの、こぎでなば、あふことかたし、けふに

思安良受波
しあらずは

中麻奈地名なるべし、さらでは信濃歌とせんよしなし、中を奈と訓べきか和名抄更科郡小谷奈字小縣郡童女奈字といふ地有、古へは乎奈と云しか、女子を乎奈子ともいふが如し、中は卿に上中下といふこと所によりて今もあり、推はかりの説なれど、猶土人に問ふためにいへり、さて是は諏方の海か又越後へ落る川などより舟にのりて行男に別るゝ女のうた也、かく様によめる類有を思ふに、船にて旅行には、先船に乗て一日も在て、別を惜みしなるべし

右四首信濃國歌

比能具禮爾。宇須比乃夜麻乎。古由流日波。勢奈能我素低母。佐夜
ひのぐれに、うすひのやまを、こゆるひは、せなのがそでも、さや
爾布良思都
にふらしつ

ひのぐれには日暮に也、枕詞にあらす、和名抄上野碓氷郡宇須比是はうすひの山に
遠からの里より別れし也、そでもといふは、我振袖をも夫の見つらんかとおもふ
よりいへるならん、勢奈能我は夫名根之也、此下に伊母能良爾と有も、妹根等爾
といふにて、夫名の名は即名有事を美言とする古の例也、根は物の本をいひて、
同じく貴む言故に、天皇を倭根子と申たてまつり、母をたら根、姉を吾根名根
などいへり

父ハ
誤ノ

安我古非波。麻左香毛可奈思。久佐麻久良。多胡能伊利野乃。於父
わがこひは、まさかもかなし、くさまくら、たこのいりぬの、おく
母可奈思母
もかきしも

まさか上にいへり、此草枕は枕詞ならず、旅のさまといふ、多胡は此國に此郡を

置し事、和銅三年の紀に見ゆ、入野は其所の野也、於父の父は久の誤なるべし、
夫の旅別の其際もかなし、別て末に思はんも悲しといふ也、於久は入野の奥とつ
いて、さて末の事を兼いへり

可美都氣努。安蘇能麻素武良。可伎武太伎。奴禮杼安加奴乎。安杼
かみつけぬ、あそのまそむら、かきむだき、ぬれごあかぬを、あせ
加安我世牟
かわがせん

本上つ毛野の國といへば、此努は之の詞にあらす、安蘇は下にも安蘇山とよめ
り、其わそといふ里に作る眞麻マの群りて有を序とす、かきは詞、むだきは身抱ムダキに
て、麻の群たるを刈て、かき抱束ツガぬるを譬として、相抱て寝れども飽かぬを、何と
か吾せんと情の餘りをいへり

可美都氣乃。乎度能多杼里我。可波治爾毛。兒良波安波奈毛。比等
かみつけの、をこのたどりが、かはぢにも、こらはあはなも、ひと
理能未思氏
りのみして

こゝも乃は野のかな也、通しとなへしものとみゆ、をどのたどりが云ふは、小野之田野等之川道にもといふか、和名抄に甘樂緑野、群馬の二郡に、おのく小野の郷あり、此中なるべし、野と村と通ふ例也、此川路里はなれて、人目なき所なれば、かゝる所を吾獨行時に、見等にわはやくとおもふ心といふ也、此下にま遠くの野にもわはなん心なく里のみ中にあへるせなかもともよみつされど二の句猶穩ならず、猶考べし

或本歌曰、可美都氣乃、乎野乃多村里我、安波治爾母、世奈波安波奈母、美流比登奈思爾

安波治の安は可の誤なるべし

可美都氣野・左野乃九久多知・乎里波夜志・安禮波麻多牟惠・許登之許受登母
かみつけぬ、さぬのくいたち、をりはやし、われはまたんゑ、ことしこずとも

左野は今もしかといふ里有、くいたちは和名抄夢久、夢青之苗也と有、是なり、台記などの體に並立とて有、をりは折也はやしは物を榮わらする事にて、卷十六に

吾角は御笠の波夜詩云く、吾毛らは御筆の波夜斯云く、吾完はみなます波夜志なといへるにいと、またんゑのゑは、天智紀童謡に、阿例掃俱流之衛と二つ有、ともに助辭也、其外集中よしゑやしのゑも同じ、ことしこずともは、來と不來ともにて、之は助辭歟たましく來ともといふなるべし

可美都氣努・麻具波思麻度爾・安佐日左指・麻伎良波之母奈・安利
かみつけぬ、まぐはしまとに、あさひさし、まさらはしもな、あり
都追見禮婆
つゝみれば

今まぐはといふ所有といへり、其まぐはに川島など有て、其渡瀬を門といへるか、こゝて朝日に向ふ所と見ゆ、其朝日のとらくとするに譬へて、よそに戀し男に、今は常に相對ひ居れば、まばゆしといへり、在つゝもは常に在て也

爾比多夜麻・爾爾波都可奈那・和爾余曾利・波之奈流兒良師・安夜
にひたやま、ねにはつかない、わによそり、はしなるこらし、あや
爾可奈思母
にかなしも

和名抄新田郡新田郷有、此下に高きねに雲のつくのす吾入に君につがな、高ねとおもひてとよめるに依に、こ、は雲といはねと雲の事也、こ、のつかなし、はつかなくの意と聞ゆ、女の我に依ながら又さもあらぬを雲の、嶺につかざる如く、問なる子らといふあるべし、よて二の句より四の句へつゞく意也

伊香保呂爾・安麻久母伊都藝・可奴麻豆久・比等登於多波布・伊射
いかほろに、あまぐもいつぎ、かぬまつく、ひと、おたばふ、いざ
禰志米刀羅
ねしめとら

此下相聞の中に、伊波能倍にいかくるくものかぬまつく比等曾おたばふいざねしめ刀良とてのせたり、いかほは神名帳群馬郡伊加保神社、呂は助辭、か沼は今も有地名也、伊つぎの伊は發語、いかほの山の雨雲のはびこりて、かぬまつといふ所までひとつにつゞけるを、吾と妹と心は一つぞと人にいはるゝに譬ふ、おたばふはおらぶといふに同じく、音高くいひさわぐなり、末の句はかくいはるゝから、いざ相寝しめたらんといふ也、ねしめてあらんので安の約たにて、常人はねしめたらんといふをとらといへり、らんをとらとのみいふは平言に多しと翫いは

れき、されとおたばふの詞穩ならず、契沖は登は曾の誤ならんといへり、按に刀は巳の誤にてとらと有しならんか

伊香保呂能・蘇比乃波里波良・禰毛巳呂爾・於久乎奈加禰曾・麻左
いかほろの、そひのはりはら、ねもころに、おくをなかねそ、まさ
可思余加婆
かしよかば

此下にいかほろのそひのはりはら我さぬに云々、又伊波保呂のそひのわか松とよめり、そひは岨ツツの事なるべし、宜長は川傍ツツのそひ也といへり、ねもころにの句は上へつゞく事なしおくをなかねそは、其榛原の奥深さを末の事に譬へいふ也、まさかしよかば、今たによくあらば、奥末の事をば餘にくたゝしく思ひかぬる事なかれ、末は末のよしこそあらめ、今先達んといふ也、よかば、よからばのらを畧けり

多胡能禰爾・與西都奈波倍氏・與須禮騰毛・阿爾久夜斯豆之・曾能
たこのねに、よせづなはへて、よすれども、あにくやしづし、その

可把與吉爾

かはよきに

多故上に出、ねは嶺也、本はよらぬものを強て引よせんとするにたとふ、卷十三かくよれと人はつけども云く、祝詞又は出雲風土記などに、八十綱はへて國を引といへる事有、之一本久に作、あにくやしづく也、右の如く引きに引けども、あやにくに鎮り居てよらぬといふ也、沈むをしづくといふも、鎮るも言はひとし、夜は與に通ふ詞、把一本抱に作るをよしとす、おもてやはらかにうちあみつゝ在て心の動かぬ也と翁の説也、四の句猶考べし

賀美都氣野・久路保乃彌呂乃・久受葉我多・可奈師家兒良爾・伊夜

かみつけぬ、くろはのねろの、くすはがた、かなしけこらに、いや

射可里久母

さかりくも

くろはの嶺土人に問べし、豆良の約多なれば、くすはがたは葛葉かつら也、かなしけはかなしきにて愛る意、いやさかりくもは彌放來也、葛かつらの遠さかり延るを序とせり、是はたゞ妹と彌遠く成を歎く也、又坊人の歌にて別來し道といふ

か、又おもふにくすはがたは地名ならんか、猶考べし

刀禰河泊乃・可波世毛思良受・多多和多里・奈美爾安布能須・安做

とねがはの、かはせもしらす、たゝわたり、なみにあふのす、あへ

流伎美可母

るさみかも

利根郡也、能須は奈須と同じく如の意、直涉するに、浪に逢如く、あやふくかしこき時に相逢をよめる女の歌也、多多を元曆本多太に作る

伊香保呂能・夜左可能爲提爾・多都督自能・安良波路萬代母・佐禰

いかはろの、やさかのゐでに、たつぬヒの、あらはろまでに、さね

乎佐禰氏婆

をさねてば

其國人のいへるは、いかはの沼は此嶺の半上に在て、沼の三方には山ども立ち、一方は開けて野也、其開し方の水の落る所をゐでと云とぞ、しかればやさかは其水の落る所の、名堰提は上にもいへる如くゐとめにて塘なるべし、虹を東詞にぬじといへり、虹は水の氣なれば此ゐでに専立べし、さて顯る、譬とせり、よし未に

顯はれてあしゝとも、いかで相寝る事を得てしあらばといふ也

可美都氣努・伊可保乃奴麻爾・宇惠古奈宜・可久古非牟等夜・多禰
かみつけぬ、いかはのぬまに、うゑこなき、かくこひんとや、ねぬ
物得米家武
もとめけん

コナギ 小水葱既に出、植はたゞ生立て有をいへり、種求といふは歌のよせ詞のみ、其小
なきを妹にたとへて、かく斗戀しからんとてはいひはじめざりしをと也

可美都氣努・可保夜我奴麻能・伊波爲都良・比可波奴禮都追・安乎
かみつけぬ、かはやがぬまの、いはるづら、ひかばぬれつゝ、あを
奈多要會禰
なたえそね

上におはやがはらのいはるづらともよめり、ぬれは上にも多出、さて絶といはん
序なり、末は吾を絶る事なかれ也

可美都氣奴・伊奈良能奴麻能・於保爲具左・與會爾見之欲波・伊麻
かみつけぬ、いならのぬまの、おはるぐさ、よそにみしよは、いま

許登麻左禮
こそまされ

和名抄莞於保 可ニ以爲一席者、字鏡莞同古九反似蒲員并、又莞於保并と有、加万又大并 竟は竟の俗
字か、さて其所のさまの、遠く見しよりも、遠くてまさりたるに譬へたり、見しよ
は、見しよりは也

柿本朝臣人麻呂歌集出也

古への歌集は歌を傳へ得るまゝに書集れば、東歌も何も交るべき也

可美都氣努・佐野田能奈倍能・武良奈倍爾・許登波佐太米都・伊麻
かみつけぬ、さぬたのなへの、ひらなへに、ことはさだめつ、いま
波伊可爾世母
はいかにせも

佐野は上に田、其所の田也、苗代は所々に、一むれづゝ作る物なれば群苗といひ
て、それをうらなひにいひかけたるなるべし、占は言の通へばむらとも云へし、
我戀の成んやと占とへば、成まじきと占に定まりぬ、しかれば今はいかにしてま
しと歎く也、世母は將爲也

伊加保世欲奈可中次下於毛比度路久麻許曾之都等和須禮西奈布母

いかほせよは伊音保に住わが夫子といふ也、わすれせなふもは忘れせぬ也、二の句の中次下の三字此卷の書跡にあらず又假字とせんも他の假字の跡に違へり、しかれば必字の誤、且落たるも有べし、元曆本に、次を吹に作、四の句も言をなさず、或説もわれと皆とりがたし、正しき本を待のみ

可美都氣努。佐野乃布奈波之。登利波奈之。於也波左久禮騰。和波
かみつけぬ、このふなばし、とりはなし、おやはさくれど、わは

左可禮賀倍
さかれがへ

船ばしは川に船を並べ、綱もて杭につなぐ故、とり放つ事もあれば、かくいひて男どわが中をはきたるゝにたとへたり、禮官本流に作るをよしとす、わはさかるがへは、吾は放らんや放らずと返る辭也、卷廿うまやあるなはたつこまのおくる我辨いもがいひしをおきてかなしも、此末にも和波佐可流我倍と有

伊香保爾爾。可未奈那里曾爾。和我倍爾波。由惠波奈家村母。兒良
いかほねに、かみなりそね、わがへには、ゆゑはなけども、こら

爾與里氏曾
によりてぞ

かみは雷也、我家人の殊にかしこむ故にはあらず、妹がおそるゝからにいかで鳴る事なかれと願ふ也、なけどもはなけれどもを畧さいふ也

伊香保可是。布久日加奴日。安里登伊倍村。安我古非能未思。等伎
いかほかせ、ふくひふかぬひ、ありといへど、わがこひのみし、とき

奈可里家利
なかりけり

いかは風は佐保風飛鳥風などいふが如し

可美都氣努。伊可抱乃爾呂爾。布路與伎能。遊吉須宜可提奴。伊毛
かみつけぬ、いかほのねろに、ふろよきの、ゆきすぎがてぬ、いも

賀伊徹乃安多里
がいへのあたり

ふろよきは零雪也、東言にしかいひけん、行過がてぬは行過かぬる也、上はゆき

敵談

過と重いはん料也

右二十二首上野國歌

之母都家野・美可母乃夜麻能・許奈良能須・麻具波思兒呂波・多賀

しもつけぬ、みかものやまの、こならのす、まぐはしこらは、たか

家可母多牟

けかもたん

美は發言にて、加茂山か、加茂といふ所國にわれば也、小櫓のすはなすにて如く也、葉廣解の如くして、ちひさき葉にて、若葉さす夏は陰好ましきものなれば、妹をはむる譬とせしならん、宣長云こならのすは高くの序也、こならは木櫓也といへり、まぐはしは古事記久波志賣遠ありとさかしてと有に同じく、くはしは愛る詞又は發言也、たかけかは、高くに歎といふに同じく、ふりあふき望む意、またんは將待也

志母都家努・安素乃河泊良欲・伊之布麻受・蘇良由登伎努與・奈我

しもつけぬ、あそのかはらよ、いしふます、そらゆとさぬよ、なが

已許呂能禮

こゝろのれ

和名抄に安蘇郡安蘇郷有、今も此川有とぞ妹がりとおもへば、石多き河原を踏ともおほえず來しといふ意也、空ゆとさぬよは、空從と思ひて來りぬるよといふ也、集中心空也土はふめどもともよめり、なか心のれは、我はかく思ひて來しを、うれしみ思ふや、汝が心を告よといふ也、或人はのれは乗れにて、我を思へといふ意也、思ふを心にのるといふといへり、猶考べし

右二首下野國歌

安比豆禰能・久爾乎佐杼抱美・安波奈波婆・斯努比爾勢牟等・比毛

あひづねの、くにをささほみ、あはなは、しぬびにせんと、ひも

牟須婆左禰

むすばさね

和名抄會津郡、ねは嶺也、佐は發語にて、國遠く也、あはなは、は相無は也、下にもあは奈布とも、あは奈倍とも有て、なくのくを轉じたり、むすばさねはむすべ也、防人の別の歌なるべし、宣長云二一三と次第して見べしあひづねのあはなは

也、しからざれば初句いたづら也といへり、元曆本勢の下卒を毛に作る同じ意也

筑紫奈留・爾抱布兒由惠爾・美知能久乃・可刀利乎登女乃・由比思
つくしなる、にはふこゆゑに、みちのくの、かとりをとめの、ゆひし

比毛等久
ひもこく

にはふは艶の字を多く書り、陸奥にもかとりといふ所有なるべし、そこに相寝
し妹が結びし紐を、筑紫へ防人に行て、其所の女に逢てよめる也

安太多良乃・爾爾布須思之能・安里都都毛・安禮波伊多良牟・爾度
あだいらの、ねにふすしもの、ありつゝも、あれはいたらん、ねど

奈佐利曾爾
なさりそね

卷七陸奥之吾田多良真弓とよみ、神樂歌にも、古今集とり物の歌にも、みちのく
のあだちのま弓とよめり、古へあだいらといへる所を、後にあだちといふか、然

らば和名抄安達郡といふならん、こゝのしといへるは猪也、猪は必臥所をかへ
ぬものなれば譬にとれり、いたらんは往たらんを畧けり、ねどなさりそねは、臥
所を外へ去事なかれど也

右三首陸奥國歌

譬喻歌

等保都安布美・伊奈佐保曾江乃・水乎都久思・安禮乎多能米氏・安
とほつあふみ、いなさはそえの、みをつくし、あれをたのめて、あ
佐麻之物能乎
さましものを

引佐細江は引佐郡、そのみをつくしの有所は、深からんと思へる淺きは人たの
めなるみをつくし也と譬いへり、たのめては、たのませての意、淺ましものをは、
淺き物との意也

右一首遠江國歌

斯太能字良乎・阿佐許求布爾波・與志奈之爾・許求良米可母與・奈
しだのうらを、あさこぐふねは、よしなしに、こぐらめかもよ、な

志許佐流良米
しこざるらめ

和名抄に志太郡有、今藤枝驛の南瀬戸川と云川邊に志太村といふ有とぞ、又駿河舞に伊波太之太衣といふも是ならん、よしなしにのよしは、此下に都麻余之許西彌ともいひて、只よる事をいへり、さればこゝも磯へよる事なしにこゝらめかは也、なしは何しに也、歌の意は、浦こゝ舟は寄事なしによるにのみ榜らんかは、磯に寄る事も有べきに、吾夫はなじかも吾方へ來ざるらんといふかる也、奈元曆本余に作る、よしこざるらめは寄來ざるらめ也、されどこはいさゝか詞たらず

右一首駿河國歌

阿之我里乃。安伎奈乃夜麻爾。比古布爾乃。斯利比可志母與。許己
あしがりの、あきなのやまに、ひこふねの、しりびかしもよ、こゝ
波故賀多爾
はこがたに

あしがりは足柄也、あききの山未しらず、ひこふねは曳舟也、しりびかしもよは後引爲る也、此山に古へ杉多ければ、船に造るに、其船すなはち山の谷などにて

造はて、後、下す時、船にをしみ綱を付て、艦を下にて漸に下す故に後引引といへり、さて其如く男の後引して、吾方へ來り難くすると譬へたり、こゝはこがたには、此許へは來り難げに也

阿之賀利乃。和乎可雞夜麻能。可頭乃木能。和乎可豆佐爾母。可豆
あしがりの、わをかけやまの、かづのきの、わをかづさねも、かづ
佐可受等母
さかずとも

かけ山といふ山なるべし、それを吾を懸て思は、といふ意にいひかけたり、こせ山をこちこせ山といふ類也、かづの木は穀か、猶外に有か、上はかづといはん序にて、下は吾をかどはせ、かどはしがたぐともといふ意也、卷十八かたがと馬にふつまにおはせもてこしべにやらば人加多波牟可母、又後撰集に春風、花の香かどふけもどにはともよめれば、ぬすむ事をかたす、かづすかどふ、などいひし也、かづさかずともは、かどしかぬともと音通へり、字鏡該折曲也加止不又久自久

多伎木許流。可麻久良夜麻能。許太流木乎。麻都等奈我伊波婆。古
たきこる、かまくらやまの、こたるきを、まつとながいは、こ

非都追夜安良牟
ひつゝやあらん

たき木こる枕詞、此山に枝垂たる松の古木の多かりけん、さて松を待によせて、
汝が吾を待といひおこさばと也、末の句は防人などに行て、私に歸る事のかなは
ねば、戀乍やあらんといふ也、やといへるは末をかぬいへば也、三の句の乎は之
の誤か、又與に通へる乎歟

右三首相摸國歌

可美都家野・安蘇夜麻都豆良・野乎比呂美・波比爾思物能手・安是
かみつけぬ、あそやまつゝら、ぬをひろみ、はひにしものを、あせ

加多延世武
かたえせん

上は序也、はひはへに同じく、長く延るを云、互に遠長く思ひわたれる中なる
ものを、何ぞ絶んといへり

伊可保呂乃・蘇比乃波里波良・和我吉奴爾・都伎與良之母與・多做
いかほろの、そひのはりはら、わがさぬに、つきよらしもよ、たへ

登於毛做婆

とおもへば

上にも此二句出、つきよらしもよは、波里の色をつきよらしめよ也、たへとおも
へば、翁も此詞心得がたしといはれき、契沖はたへは白樺の事にて、吾に譬へた
り、我方へ思ふ人の心のよれかしたおもふをそへたりといへと釋ならず、中院本
及仙覺抄多做の上比の字有て、仙覺はひとへの事として、ひとへにおもへばの意
也といへり、考べし

志良登保布・乎爾比多夜麻乃・毛流夜麻能・宇良賀禮勢那奈・登許
しらはふ、をにひたやまの、もるやまの、うらがれせな、どこ

波爾毛我母

はにもがも

しらはふ枕詞、新田郡の山也、乎はをつくはをはつせの字の如し、もる山は卷
十三三諸は人の守山とよめるが如く、山守すゑて守るをいふ、うらはうれに同じ
く末の事也、せなは爲な也、そこは常葉也、卷六益常葉の木といへり、我中の
かはらさらんを乞のみ

右三首上野國歌

美知乃久能・安太多良末由美・波自伎於伎氏・西良思馬伎那婆・都
みちのくの、あだいらまゆみ はじきあきて せらしめきなば、つ
良波可馬可毛
らはがめかも

久だいらま弓上に引つ、弦をとづし置て、そらしめおきなば、弦をげ難かるべし
といふを、かく東言にいへる也、きなばおきなばを畧けり、譬る心は夫をゆる
べおかば、末遂にかなはじとおもふ也

右一首陸奥國歌

雜歌

都武賀野爾・須受我於等伎許由・可牟思太能・等能乃奈可知師・登
つむがぬに、すゝがねとさきこゆ、かんしだの、どのゝなかぢし、どが
我里須良思母
りすらしも

すゝは鷹の尾録也、かんしだは駿河志太郡志太の里に上下有ていへるならん、
奈か知欽明紀長曰三箭田珠勝大兄皇子一仲曰三譯語田淳中倉太珠敷尊一少曰三笠籠
皇女ニ云、此仲をなかぢとよめり、古言なるべしさらばなかぢは中男をいふべ
し、師は助辭也、なかぢは此下にもよめり、どがりは鳥狩也、又卷一九はつとがり
を初鷹狩と書るも義をもて書るにて鳥狩也、東にて殿といふは、國の守介などの
家をいふべし、又郡司國造の家をいふとおぼしきは、駿河國府は安部郡に在し
を、駿河舞に伊波太奈留之太戸乃上乃どうたふは、志多郡の郡領の家をいふべけ
れば也、是をも合せ考るにかんしだは駿河也

或本歌曰美都我野爾、又曰和久胡思

わくこは若子也、下にも出

須受我爾乃・波由馬宇馬夜能・都追美井乃・美都平多麻倍奈・伊毛
すゝがねの、はゆまうまやの、つゝみるの、みづをたまへな、いも
我多太手欲
がたゝてよ

契沖は鈴之音のはや馬といへりとす、又は須受之嶺にて地名かはゆまうまやは

早馬にて、紀にも驛をはいまど訓り、つゝみぬは美はそへいふ詞にて簡井也、思ふ
女の水汲時に直に妹が手より給へといへる也

許乃河泊爾。安佐保安良布兒。奈禮毛安禮毛。余知乎曾母氏流。伊
このかはに、あさなわらふこ、なれもあれも、よちをぞもてる、い

低兒多婆里爾

でこたばりに

余知今本知余と有、古本によりて改、卷五余知古良と手たづさはりて、卷十六に
よれる子らが四千庭などいふも、よちとは同じ比はひの子といふ古語也、母氏流
はよき比はひと思ひてあるといふを約めいへるか、こは猶考べし、伊低は乞也、
其兒を吾に給はるねと也、其母も子と同じ所に居たるにいひかけしなるべし、或
人は多婆里爾の爾は禰の誤ならんといへり

一云麻之毛安禮母

ましはいまし也

麻等保久能。久毛爲爾見由流。伊毛我做爾。伊都可伊多良武。安由
まどはくの、くもぬにみゆる、いもがへに、いつかいたらん、あゆ

賣安我古麻

めわがこま

まは發言にて遠く也、妹がへは妹之家也、安我は吾也

柿本朝臣人麻呂歌集曰、等保久之氏、又曰安由賣久路古麻

安豆麻治乃。手兒乃欲妣左賀。古要我禰氏。夜麻爾可禰牟毛。夜杼

あつまぢの、たこのよびさか、こえがねて、やまにかねんも、やど

里波奈之爾

りはなしに

此下にも、本は同じ歌あり、宣長云手兒はたこにて、即田子浦同所にて、今の薩埵
山也、紫式部集にもたこのよびさかどよめりといへり、ねむものゝは助辭

宇良毛奈久。和我由久美知爾。安乎夜宜乃。波里氏多氏禮婆。物能

うらもなく、わがゆくみちに、あをやぎの、はりてたてれば、もの

毛比豆都母

もひづゝも

うらもなくは何心もなく也、はりてたてれば、柳の芽の張たる也、物思ひ出つといふを畧けるなれば、上のつを濁音に書り、豆一本豆に作る、ものもひでつもし、思ひ出にて意同じ

伎波都久乃・乎加能久君美良・和禮都賣村・故爾毛乃多奈布・西奈きはづくの、をかのくゝみら、われつめど、こにもものたなふ、せな等都麻佐福とつまさね

仙覺風土記を引て、キハツク伎波都久岡常陸國眞壁郡に有といへり、くゝみらは字鏡菊々々爾雅菊注本神曰一名輪餘薤奈女、薤太々々薤奈女、薤太々々薤奈女と有、濱臣云、菊を久とよめるは、蝦蟇よりの訓ならん祝詞に谷蟻など有、さてこのくゝみらは、菊と薤ミチナク薤と内なるべしといへり、故爾毛の下乃は美の極草より誤れるか、みたなふにて満無也、末は夫とともに摘んを願ふ也、左福は上の常陸歌のさねくやらさねといふ所にいひし如く、他よりいふ言を吾願ふ事にもいへり

美奈刀能也・安之我奈可那流・多麻古須氣・可利巳和我西ニテ等許みなとのや、あしがなかなる、たまこそすげ、かりこわがせと、とこ

乃傲太思爾のへだしに

一本初句美奈刀安之能と有、繁く集り生てまろくみゆるを玉笹などいふ如く、小菅の繁れるを玉といふべしと翁はいはれき、又すべて玉といへるは、たゞはめていへるふてもあるべし、へだしの一は知に通ひて、床の筵の中隔をいふ

伊毛奈呂我・都可布河泊豆乃・佐左良乎疑・安志等比登其等・加多いもなるが、つかふかはづの、さくらをき、あしとひとこと、かた里興良斯毛りよらしも

下に妹名根とよみ、兄名ともいへば、妹名と斗もいふべし、只は等に同じ、都かふは妹と吾と行ちがふを云なるべし、河泊豆は河津也、さくらをきは萩に大小有て、其小きをいふべし、されどあしと一こといへば常の萩也、歌詞にさくらといふのみならんあしとひとこととは蓋とつ如くといふ、蘆萩は同じく専ら水に生て、形も似たり、今男の行河津の向ふより、よそながら心がけたる女の來るに、行ちがはん時、何ぞに事よせて言問よらんとおもふにこゝにあしをきの有

て分ちがたく見ゆれば、いづれが何れぞと問よらんといふ也、伊勢物語に忘草を
こは何ぞと問しに、心は異にて、事は似たりと翁いはれつれど、つかふと行ちが
ふ事とせんは強言ならん、宣長云つかふは東生などいへる地名也初句の言
は結句へかけて見べし、ひとことは他事也、妹が思ふ事をえいひ出すして、先つ
かふ川の萩よ蘆よと他の事を語りて、それをするべにいひよらすと也といへり、
此説穩なるに似たり

久佐可氣乃・安努弩奈由可武等・波里之美知・阿努弩波由加受氏。
くさかげの、あぬゝなゆかんと、こりしみち、あぬゝはゆかすて
阿良久佐太知奴。
わらくさだちぬ

卷十二草陰之荒蘭ウツガケノアラシの崎とよみ、倭姫命世紀に汝國名何問賜白ソトフク、草陰阿野國ともわ
り、皆あどつゝさたる枕詞やらんか、宣長云阿努は地名の如く聞ゆ、奈は爾の誤
かといへり、翁云あぬゝなは吾主根之メノキといふ言也、根を乃とも奈ともいふは、上
に勢奈能我そでもと有しに同じく、ぬしも名も根も、あがめいふ詞也、さればそ
の乃を奴に通はしいへり、下の奈は之の意にて辭わぬゝはゆかす云くは、吾主が
通はんとて人目なき路をひらさしが、今は通はず成て、荒草の生立ぬると女の悲

しめる也とわれど、あぬゝなの詞穩ならず、一本二の句安の下一つの努の字な
し、官本四の句阿の下努の字なし

佐ハ

波奈知良布・巳能牟可都乎乃・乎那能乎能。比自爾都久佐麻提。伎
はなちらふ、このむかつをの、をなのをの、ひじにつくまで、さ
美我與母賀母
みがよもかも

花散向峯也、をなは今も上總に在地名也、をはその峯なるべし、自は目の誤な
らんひもにつくまでと訓べし、一本佐の字無をよしとす、高き峯の低く成て、腰
の垂紐につく代まで、君が代はあれかしといふなるべし、さ々れ石のいははと成
てといふとはうらうへ也

思路多倍乃・許呂母能素低乎・麻久良我欲・安麻許伎久見由・奈美
しろたへの、ころものそでを、まくらがよ、あまこぎくみゆ、なみ
多都奈由米
たつなゆめ

袖を纏といひかけて、下はまは發語、くらがは下總のくらがをいふべし、海人を

よめれば也。此末に麻久良我乃許我能和多利とよめるをば、冠辭考に上野の倉下クラガにやどもわれど、必別と定めがたければ、こゝによりてこれをも下總とすべきよし翁いはれたり、よはよりの畧也

乎久佐乎等。乎具佐受家乎等。斯乎布爾乃。那良倣氏美禮婆。乎具をくさをと、をぐさすけをと、しはふねの、ならべてみれば、をぐ

佐可利馬利
さかちめり

をくさといふ所の男也、すけをば同所の次丁なるべし、是を助丁ヌケテといへば、上のをくさをといふは正丁なるべし、正丁は男さかりの公役を勤るもの次丁は老たる男也、しかればこゝのすけをば中男をいへり、卷二十に助丁といへる是に當れり、令にとし十七より廿までを中男、廿一より六十までを正丁、六十一より六十五までを次丁といへり、此集上丁といふはかの正丁にて、助丁といふはかの中男次丁を兼いふならん、斯乎の手一本抱に作こゝは本の誤也、潮舟にて枕詞也、海邊の物をばしかいふ事、しは貝、しは蘆などの如し、舟の並びたるを、右の男を並べくらぶるにたとふ、可利の利は元曆本知に作る、勝めりにて、をぐさの正丁はま

されりと思ふ女のいふ意也、宣長云乎久佐と乎具佐とは久の清濁異なれば別地なるべし、さて清濁の異なるのみにて、似たる地名なる故に、それをふしにして、ならべて見れば云々とよめるならん、もし一つの地名としては、をくさ勝めりとのみいひては何れとも分らずして、聞えがたしといへり

左奈都良能。乎可爾安波麻伎。可奈之伎我。古麻波多具等毛。和波

さなづらの、をかにあはまさ、かなしきが、こまはたぐとも、わは

素登毛波自

そとととじ

神名帳に常陸國那賀郡酒列磯崎神社有、是さなづらといふ所をか書しならん、かなしきがは、上に其かなしきをとにたてめやもといふ所にいへり、こまはたぐともは、手綱を手ぐりて、馬をわゆまする也、卷十九いはせ野に馬たぎ行ともよめり、多具利の約言也、神代紀に素蓋鳴尊秋則放天斑馬一使伏田中といふに似たる事也、わはそともはじはざるあしきしわざともおもはじ也、又大平云喚犬追馬鏡、泉の追馬喚犬など書るを見れば、そは馬を追ふ聲也、しかれば、そといひても追ひやらじ也、彼自は追はじなるを上毛に於のひゞきある故に、於を畧ける也といへり、是も一つの考なれば擧つ

於毛思路伎・野乎婆奈夜吉曾・布流久左爾・仁比久佐麻自利・於非
おもしろき、ぬをばなやきそ、ふるくさに、にひくさまじり、おひ
波於布流我爾
ばおふるがに

我爾はがねに同じ詞にて既いへり、是はたゞ春の歌のみ

可是乃等能・登抱吉和伎母賀・吉西斯伎奴・多母登乃久太利・麻欲
かせのどの、とほきわきもが、きせしきぬ、たもとのくだり、まよ
比伎爾家利
ひきにけり

風のどの枕詞、是は防人にて筑紫へ行て、三年経る故に故郷の妹か織纏て着せし
衣の袂のそこなひ來つといふ也、卷七ことし行新防人が麻衣肩のまよひを誰か
とに見んとよめるにひとし、紺の事上にいへり、くだりは行と同じくて、袂の上
より下までまよひたがといふなるべし

爾波爾多都・安佐提古夫須麻・許余比太爾・都麻余之許西爾・安佐
にはにたつ、あさでこぶすま、こよひだに、つまよしこせね、あさ

提古夫須麻
でこぶすま

にはにたつ枕詞、麻布の小衾也、提は多倍の約言也、こよひだにといへるは、來す
とも、こよひばかりもといふ也、つまよしこせねは、夫をより、來させよと夜麻の
衾に對ひていへるがわはれ也、卷九城のくに、不止かよはん妻の社妻依來西尼
妻といひながらといふに同じ、神代紀妹盧豫爾豫爾豫利據禰これは目依に依
て來ねといふ也

相聞

古非思家婆・伎麻世和我勢古・可伎都楊疑・宇禮都美可良思・和禮
 こひしけば、さませわがせこ、かさつやぎ、うれつみからし、われ
 多知麻多牟
 たちまたん

こひしければは戀しからば也、戀しからんを集中こひしけんといふが如し、かさつ
 やぎは垣内柳也、今も田舎にて糸たれずして上へ小枝のさす柳を植て垣とせる
 ・も多し、越るに安からん爲に其柳の末枝ホツエを採からして待さま也、卷十一あし垣の
 末かさ分て君こゆともよめり

宇都世美能・夜蘇許登乃徹波・思家久等母・安良蘇比可禰氏・安乎
 うつせみの、やそことのへは、しげくとも、あらしひかねて、あを
 許登奈須那
 ことなすな

是は顯身の世中をいひて枕詞にあらず、やそことのへは八十言の上にて、多くの

設般ニナ

人のいひさわぐに争ひ得ずして、吾を言にいひなすことなかれと也

宇知日佐須・美夜能和我世波・夜麻登女乃・比射麻久其登爾・安乎
うちひさす、みやのわがせは、やまとめの、ひさまくごどに、わを
和須良須奈
わすらすな

うちひさす枕詞、みやのわがせは、東の國造郡司などの子の京に上りて大宮に仕
奉るをいへり、やまとめははつせ女などのと、垂仁紀に后の御膝を枕としてい
ねましといふ事有、又卷五琴娘が人の膝のへ吾枕かんともよめり、わすらすな
はわするな也

奈势能古夜・等里乃乎加耻志・奈可太乎禮・安乎禰思奈久與・伊久
なせのこや、とりのをかぢし、なかだをれ、あをねしなくよ、いく
豆君麻氏爾
づくままでに

名夫の子よ也、子とは男女ともにいへり、とりのをかは地名なるべし、耻は路、志
は辭也、此間路は中のたわめる所ならん、集中峯のたをりともよめり、そのたを

りを男の中絶て來ぬに譬ふ、ねしなくは、不令寢也、よは辭いくは息也、かく中絶
し故に我は夜もねず、長息をつくままでに物思ふと也

伊禰都氣波・可加流安我手乎・許余比毛可・等能乃和久胡我・等里
いねつけば、かゝるわがてを、こよひもか、そのゝわくごが、とり
氏奈氣可武
てなげかん

いねつけば、紐をうすづきて米とする也、かゝるは和名抄輝加利手足拆裂也とい
ふ是也、殿の若子が取て歎かんといふからは、いと賤女にはわらじ、良民などの
女が身をくぢりて、賤女の業もていへるにぞ有べきよき、人も山がつ海人などに
譬ていふも歌の常也、下においていなといねはつかねといふもひとし、殿の若
子の事上にいへり

多禮曾許能・屋能戸於曾夫流・爾布奈未爾・和家世乎夜里氏・伊波
たれぞこの、やのとおそぶる、にふなみに、わがせをやりて、いは
布許能戸乎
ふこのとを

我家ノハ

古事記に八千矛神の御歌に、をどめのなすやいたを遊曾夫良比わがたせれば比許豆良比わがたせばと有て、押開き、引開かんとするあり、にふなみはにひなめ也、十一月公の新嘗祭有時は、國の廳にても同じ祭すれば、其國の里長より上は、皆廳に集ふべし、しがればその里長などの家にて妻の物思しく在を、忍ひ來たる男の戸をおしひふかんとする時、其妻のよめる也、上にかつしかわせばをにへすともよめるは、家にて爲なれど事はひとし、家元曆本我に作るをよしとす

安是登伊倣可。佐宿爾安波奈久爾。眞日久禮氏。與比奈波許奈爾。

あせといへか、さねにあはななくに、まひくれて、よひなはこなに

安家奴思太久流

あけぬしだくる

あせといへかは、何ぞといふ事か也、さねにあはななくは、實に逢との無やといへり、眞日くれては、いたく暮はてたるをいふべし、よひなはこなに云ふは、日の暮て夜は來なくして、夜明ぬるわしたに來るは、實に逢まじきとてするわざ也と女のうたがへる也、初夜ならでも、惣ての夜をよひといふ事、古への常也、よひなはこひには也、あけぬは明ぬる也、しだはあしたを容けりと翁いはれき、大平

云思太は時といふと也、此卷末あは思太も、又わすれん之太は又かなしけ之太は卷廿わすれも之太はなぞいへる、朝にてはかなはず、たゞ時也さてあしたといふは、明る時といふ意なるべしと、いへりさも有へし

安志比奇乃。夜末佐波妣登乃。比登佐波爾。麻奈登伊布兒我。安夜

あしびきの、やまさはびとの、ひとさまに、まなといふこが、あや

爾可奈思佐

にかなしき

山澤を多の語にいひ轉して、又重ねて人さにはといひ下したり、集中に父母に我はまな子ぞ、さいばらに、あやめのこはりの大領の未名牟奈女止以戸といへるにひとしくて、庶子をば其家にも他人もかるしめ、嫡妻の子を眞なむすめと人も多くなふとむ、その女こそ萬づ事もなければ吾はもとより深く思へといふ也と翁いはれき、されと穩ならず猶考べし

麻等保久能。野爾毛安波奈牟。已許呂奈久。佐乃乃美奈可爾。安倣
まとはくの、ぬにもあはなん、こゝろなく、さとのみなかに、あへ

流世奈可母
るせなかも

眞は詞にて遠く也、みなかは眞中也、上にかみつけぬをどのたどりが川路にも子
らはわはなくひとりのみしてといへるに似たり

比登其等乃、之氣吉爾余里氏。麻乎其母能於夜自麻久良波。和波麻
ひとごとの、しげきによりて、まをこものおやじまくらら、わはま
可自夜毛
かじやも

まをこものは蔭にて、こゝはこも枕をいへり、冠辭考こまくららの條にくはし、眞
は詞、乎にて、小は小菅小篠の小の如し、おやじは同じ也、わは吾は也、歌の意は
人言の繁きによりて同じ枕をせざらんやは、人言はしげくとも共寝せむとなり
巨麻麻思吉、比毛登伎佐氣氏。奴流我倍爾。安村世呂登可母。安夜
こまにしき、ひもときささけて、ぬるがへに、あせせろとかも、あや
爾可奈之伎
にかなしき

高麗錦の紐などいふは歌詞なるをもて、東にてもよめるなるべし、から衣などい
へる類也、ぬるがへには寝るが上に也、あせせろとかもは、何とせんとか也、吾
と夫とかもといふべけれど、村の濁音もて書ればさにはあらず

麻可奈思美、奴禮婆許登爾豆。佐爾奈傲波。已許呂乃緒呂爾。能里
まがなしみ、ぬればことにづ、さねなへば、こゝろのをろに、のり
氏可奈思母
てかなしも

麻は詞、相寝れば人言にいひ出らるゝ也、さねなへばのさは發語、寝ねば也、爾を
延て奈傲といへり、緒ろのろは助辭にて、緒はかけつらなる事に云事也、されど
輕くいへる所にて、意無も有は言の常也、のりては常に心の上に有なり

於久夜麻能、眞木乃伊多度乎。等村登之氏。和我比良可武爾。伊利
おくやまの、まさのいたとを、とゝとして、わがひらかんに、はり
伎氏奈左爾
さてなさね

かく山の枕詞、眞木は惣て檜をいふ、といは男の戸を叩く音也、さて三の句にて切て、吾聞かんにとは、女のひらく也、末は入来て寝よといふ也、奈すは寝る事の古語也、卷五夜周伊奈佐農、古事記八千矛神御歌、伊遠斯那世など有

夜麻籽里乃・乎呂能波都乎爾・可賀美可家・刀奈布倍美許曾・奈爾やまどりの、をろのはつをに、かゝみかけ、となふべみこそ、なに

與曾利雞米

よそりけめ

和名抄山雞一名鷓鴣夜万云々、呂は助辭にて、尾の秀オつ尾也、尾の中に長さをいふから國の魏といふ代に、山雞をかひて鳴ざりしに、尾の方に鏡を置たりしかば、よく鳴つといひ傳へし謬もてよみつらん、既に淨御原藤原宮などの比には、からごとを語繼にせれば、これらは京に仕奉りし男の、東へ歸りてよみたるなるべし、となふは辭たてよふ也、それを名を唱へらるゝにいひよせたり、さてかく斗廣く名をとなへられんとてこそ、人の汝に吾を言よせ初たりけめといへり、よそりは人のいひよするをいふ、宣長云、山どりの云々、から國の故事は此歌には叶はず、これは或人の云、山鳥の尾は夜いみじく光る事有ものにて、人其光を見

て捕んとして行に、やゝ近くなるまでうごかず、今まさに捕ふべきほどに近づくと時に、俄に立去て、又行先の方にて光るを、人又行て捕んとすれば、又さきの如くにて、終に捕がたきもの也、されば此歌の鏡かけといふは、尾の鏡の如く夜光るをいふ、となふべみは捕ふべみ也、たとへたる意は、山鳥の捕へらるべく見えて、とらへがたき如く、女の吾になびくべきさまに見えながら、つひになびかぬにて、はじめなびくべく見えたれはこそ、心をかけていひよりそめたれの意也といへり、右の説いとよく歌に叶へり、但し其意ならば、結句けれど有べきを、けめといへるはいさゝか心得ずとのり長いへり、猶考べし

由布氣爾毛・許余比登乃良路・和賀西奈波・阿是曾母許與比・與斯ゆふけにも、こよひとのらろ、わがせなは、あせぞもこよひ、よし
呂伎麻左奴
ろきまさぬ

名占を問しにも、君は今夜來んと告たる也、のらろはのるを延言り、夕けもかなへるに、何ぞや今夜來まさぬと也、呂は助辭也、上の妻よしこせぬのよしに同じ、これはよそり、又はことよせなといへるとは似て異也

安比見氏波。千等世夜伊奴流。伊奈乎加母。安禮也思加毛布。伎美
わひみては、ちとせやいぬる、いなをかも、あれやしかもふ、さみま
未知我氏爾
ちがてに

卷十一に載たり

柿本朝臣人麻呂歌集出也

思麻良久波。禰都追母安良牟乎。伊米能未爾。母登奈見要都追。安
しまらくは、ねつゝもあらんを、いめのみは、もとなみえつゝ、あ
乎禰思奈久流。
をねしなくる

夢のみにとては、暫も寝ぬよしをいへる一首の心にたがへり、伊は於の誤にて、
かめのみにと有つらん、於米は卷廿東歌に、於米がはりせずといひ、且面は面影
を畧さいふ事、この次に於母にみえつるといへる是也、面影を卷二には影に見
えつゝともあれば、いづれにも畧さいへる也と翁はいはれつれど、按にねつゝも
あらんをといふは、夢をも見ず、うまいせんといふにて、中中に夢に見えてうま

いしがたきといふなるべし、あをねしなくるは我を寝せしめぬといふ意也、上に
も同語有

比登豆麻等。安是可曾乎伊波牟。志可良婆加。刀奈里乃伎奴乎。可
ひとづまと、あせかそをいはん、しからばか、となりのきぬを、か
里氏伎奈波毛
りてきなはも

あせかすをば、何かそれをも、他妻を何ぞや手もふるまじき物といはん、しかい
はい、隣の衣を借りて着る事の無かほといふ也、契沖云、上のしからばかのかも
じを下へくだして、きなばかもと心得べしといへり、毛は助辭

左努夜麻爾。宇都也乎能登乃。等抱可騰母。禰毛等可兒呂賀。於由
さぬやまに、うつやをのどの、どはかども、ねもどかころが、おゆ
爾美要都留
にみえつゝ

さぬ山は地名なるべし、翁はさは發語にて野山也といはれつれど、野に斧うたん
事いかいあらん、打よ斧の音の遠かれどもといふ也、風のとの遠さとつゝくる如

く、斧の音は遠きといはん料のみ、由は母の誤にて、於母に見えつるなるべし、道は遠くあれども吾今夜かく行てねんものどてか、妹が面影に見えて有しはと、妹がそとへ男の行至りていへる也

宇惠多氣能。毛登左倍登與美。伊低氏伊奈婆。伊豆思牟伎氏可。伊
うゑたけの、もとさへとよみ、いでいなば、いづしむきてか、い

毛我奈藝可牟
もがなぎかん

植は生ひ立て在をいふ、古事記大河原の宇惠具佐とも有、風に竹の末の鳴りさわ
ぐをば常にて、本さへといへり、是は家こぞりて泣さわぐを強ていふ也、いでい
いなば、防人の出立をいふなるべし、いづしはいづち、なぎかんはなげかん也、
上に霞のるふじの山びにわが來なばいづ知むきてか妹がな氣可牟といふに似た
り、藝元曆本氣に作る

古非都追母。手良牟等須禮村。遊布麻夜萬。可久禮之伎美乎。於母
こひつゝも、をらんとすれど、ゆふまやま、かくれしきみを、おも

比可禰都母
ひかねつも

卷十二旅の歌に、よしゑやし戀しとすれど木綿間山越にし公がおもほゆらくに
と有は同じ歌と見ゆ

字倍兒奈波・和奴爾故布奈毛・多刀都久能・奴賀奈徹由家婆・故布
うべこなは、わぬにこふなも、たどつくの、ぬがなへゆけば、こふ
思可流奈母
しかるなも

うべこなは、諸子等者也、此歌の奈は皆良に通へり、和奴はわれらといふ言を
東言に和奴といふなるべし、たどつくのは立月之也、東には、刀といふか、ぬが
なへゆけば、流去者ならん、立行月日を流るゝ月日ともいへり、こふしかるな
もは、妹が我に戀しかるらん、別て後立行月日の流れ去て久しく成ぬればといふ
也

或本歌末句曰、努我奈徹由家杼、和奴賀由乃徹波

此賀由の下可の字落たるか、わぬがゆかなへばにて、ながれゆけと吾ゆかねばと

誤敵敵
ニテ

誤敵敵
ニテ

いふ意也、上に寝ねばといふを佐禰奈波といへるに同じ、宣長云或人のいはく賀由は由賀を下上に誤れるにて、わぬゆかなへば也といへり、是もしかり

安都麻道乃・手兒乃欲婢佐可・古要氏伊奈婆・安禮婆古非牟奈・能
あづまぢの、たごのよびさか、こえていなば、われはこひんき、の
知波安比奴登母
ちはわひぬとも

たごのよび坂上に出、是も防人の別か、三年にて歸れば也、卷十二みさごゐるすにをる舟のこき出なばうら戀しけん後はわひぬとも

等保斯等布・故奈乃思良禰爾・阿抱思太毛・安波乃倣思太毛・奈爾
とほしとふ、こなものしらねに、わほしだも、あはなへしだも、あに
已曾與佐禮
こそよされ

ましといふと云にてめづること也、こなものしら嶺は東に在て、人のめづる嶺なるべし、爾はしらねの如爾といふ意也と翁はいはれつれと穩ならず、宣長云此山遠き故に、見ゆる日と見えぬ日とあるを、逢ふ日と不逢日と有に譬へたり、こな

しらねに逢とつゝきたるは、歌の意の言と、譬へのうへの言とを交へていへる古歌の例にて、しらねにあふは、しらねの見ゆるといふ意なるを、あふといふは歌の意の言也といへり、さてしだの言は上にいへる如く、あしたとしてはかなはず時といふ事とすべし、あはなへしだはあはぬ時といふ也、上にもあはぬをあはなふとよめり、なにくそよされは、我は汝にくそ心はよりたれ也

安可見夜麻。久左禰可利曾氣。安波須賀倍。安良蘇布伊毛之。安夜
わかみやま、くさねかりそけ、あはすがへ、あらしふいもし、あや
爾可奈之毛
にかなしも

わかみ山地名也、上は此山の草を刈除る如く、くさくの障をよけて逢が上にと也、あはすの頂は清て相するといふ言、賀倍は其がうへのうを畧けり、上に寝るが上を奴流我倍爾といふに同じ、下は人にはあはすと争ふが深くうつくしといへり

於保伎美乃。美巳等可思古美。可奈之伊毛我。多麻久良波奈禮。欲
おほきみの、みことかしこみ、かなしいもが、たまくらはなれ、よ

太知伎奴可母
だちきぬかも

防人の立時の歌とみゆ、夜深く立て、ことに別れの悲しきを道にてよめるなるべし、よだちは夜立也と翁の説也、宣長はよだちは役の事也といへり

安利伎奴乃・佐惠佐惠之豆美・伊倣能伊母爾・毛乃伊波受伎爾氏。
わりぎぬの、さゑくしづみ、いへのいもに、ものいはずきにて
於毛比具流之母
おもひぐるしも

敏教乃誤ト
ニ毛乃有也

柿本朝臣入麻呂歌集中出見上巳詮也

卷四珠衣の狭藍ササ左謂しづみ家の妹にもいはずきオモヒカキツレて思金津裳とわりてそこに註せり、入麻呂家集は此撰より後に顯れたる物と見ゆれば此卷に東歌に載るを本とすべし、今本毛乃乃と有は誤なれば、一の乃もじは除けり、註の詮を元曆本記に作る

可良許呂毛・須蘇乃宇知可倍・安波禰村毛・家思吉已許呂乎・安我
からころも、すそのうちがへ、あはねども、けしきこゝろを、あが

毛波奈久爾
もはなくに

卷十一朝影に吾身は成ぬ辛衣禪カラスウのあはずて久しくなればともよみて、古へ韓人の衣ヌイの裔スレおはさりけん、うちがへは打交にて、衣は打交て合するものなればいふにて、一二の句は不レ相といふ序也、けしき心は異コトなる心也
或本歌曰、可良已呂母、須素能字知可比、阿波奈做波禰奈做乃可良爾、許等多可利都母モ

あはなへば、あはねば也、ねなへのからには不レ寝ながらに也、ことたかりつものは言痛也

須流家ノ下

比流等家波・等家奈做比毛乃・和賀西奈爾・阿比與流等可毛・欲流
ひる、とけば、とけなへひもの、わがせなに、あひよるとかも、よる
等家也須流
とけやすけ

とけなへは、不レ解也、ひもの、乃は、之ガと心得べしあひよるは夫に吾相よる也、上のつまよしこそねといふは、夫をこなたへよせよにてうらうへ也、元暦本よる

どけ也。須家と有をよしとす、夜解易き也、さていはひて解しとも、又解るを君に
わはんさがとも、わざと解ていはふとも、かゝる事は定めなくいへり。

安左平良乎。遠家爾布須左爾。宇麻受登毛。安須伎西佐米也。伊射
あさをらを、をげにふすさに、うますとも、あすさせさめや、いざ

西乎騰許爾

せをどここに

良は助辭、麻笥マケに多オホに也、卷八なでしこの花總ハナノカミ手折といふも多き事也、しかれば
布佐を延て布須左といへり、翁云あすさせさめやは麻衣マサキを令著キさらめや也、阿佐
曾を約轉して安須と云といはれき、これを穩タカならず、宣長云、四の句は明日アスキ來せ
さらめや也、明日來といふは、すべて月日の事を來歴キレキゆくといひて、明日の日の
來る事也、結句は率ヒツせ小床コトコに也、中古の言に、人をさそひたつるにいざせたま
へといへると同じ、一首の意は、夜の業に女の麻を續居る所へ、男の來てよめる
にて、早く寝んと女を誘イヒナふ歌也、今宵のみ麻を多くうますとも有べし、明日も
來らざらんや、あすの日もあれば、明日又うみたまへ、こよひは其業をやめて、い
ざ早く小床に入て寝んと也といへり

都流伎多知・身爾素布伊母乎・等里見我禰・哭乎曾奈伎都流・手兒
つるぎたち、みにそふいもを、とりみがね、ねをぞなきつる、てこ
爾安良奈久爾
にあらなくに

つるぎたち枕詞、身に添へき妹を見難くて、縁兒にもあらぬに聲立て泣といふ
也、卷四たわらはのねのみなきつゝといふに同じ、手兒は眞間のでこな歌に既
にいへり、こゝは縁兒の事にいへる也、先は幼をいへど、またおとなと成てもい
ひ、あるは呼名ともせしと見えたり、事に依て心得べし。

可奈思伊毛乎・由豆加奈倍麻伎・母許呂乎乃・許登等思伊波婆・伊
かなしいもを、ゆづかなへまさ、もころをの、こと、しいは、い
夜可多麻斯爾
やかたましに

初句にて句也、なべ巻は草を斜に並べ纏げばいふともすべけれど、こゝては此歌に
よしなし、こゝは相射る爲に如已男モコヲの各戸束を巻調るを以て、並べ巻といふなら
ん、もころは如といふ古言也、此下にを鸚の母已呂とよめり、母は眞也、其呂は其

登トふて如ニに同じ、卷九もころを、如已男と書りおのれとさきの男といふ也、いやかたましには射哉勝んにといふにて、二の句よりかゝる也、さて相似たるほどの男どちならば、我ぞ勝んとおもふに、妹がうへの事には力も及ばずといふ也と翁いはれき、宣長云射哉かたましにといひては、疑のやの辭といのはず、射ぞといはでいかゞ、いやは彌也といへり

安豆左由美。須惠爾多麻末吉。可久須酒曾。宿奈莫那里爾思。於久あづさゆみ、すゑにたまゝき、かくすゝぞ、ねなゝなりにし、おく乎可奴加奴をかぬく

古の弓は木のかぎりして作れるは、彌直くして、弓末に弦音なし、鞘の音のみにては勢足はぬ故に、弓末に玉を纏、鈴をもつけしなるべし、梓弓爪引夜音の遠音など、鳴弦するもこれらの音あひて、遠く聞ゆべし方の物に玉と鈴をつけし事多かり、是は其鈴の音を寝にいひかけたる序のみ、ねなゝなりにしはぬる事無來にし也、下に宿莫敵とも書つ、おくは未ホて未をかねつゝ強ずして有間に遂に妹と寝る事も無なりしよと歎く也と翁いはれき、宣長云かくすゝそは如此爲カにて、俗にかくしいゝといふが如しといへり、此卷末にこそげろのうらふくかせの

安騰^{アト}頂^ト酒^ス香^カといふも、しかりさて末に玉まきは末を大切に思ふ譬とすべし、元曆本宿奈奈と有ぞよき

於布之毛等・許乃母登夜麻乃・麻之波爾毛・能良奴伊毛我名・可多
おふしもと、このもとやまの、ましばにも、のらぬいもがな、かた
爾伊氏牟可母
にいでんかも

おふしもとは生^{ナマ}繁^{シメ}本^ノの畧言也、毛等はすべて木立をいふ、孝德紀^{モトユキ}模^モ騰^ト渠^キ登^ト爾^ニはな
はさけどもと有是也、このもとやまは此本山にて、上の言を重ねいふ也、ましば
にもは、上よりは本山の眞柴といひかけて、意は眞^{マコト}敷^シ也、眞は詞、敷はしばし^シの
意、のらぬいもが名云ふは、しばし^シも告^ツぬ妹^{イモ}が名なれば、占かたに出んやとい
ふ也、上にまごでにもものらぬ君か名うらに出にけりといへるにひとし、此しば
し^シを輕て見ざれば歌の意解がたし、眞定にもものらぬといふ心ざるを、いひ下し
たる序の言を以て、しばし^シといへるのみなるべしと翁いはれき、宣長いとく、
敷^シといふことこゝにては聞えず、此卷下に、あしひきの山がづらかけ麻之波、にも
えがたきかけをおきやからさんとも有、共に清音の波の字をかけりかれおもふ
に、俗に物を惜むをしはさといふと同言にて名を告る事を惜みて、いさゝかも告

らぬ妹が石といへるか、下なるもいさゝかも得がたきにて聞ゆる也、少しなりともと思ふに少しも得ぬは、かなたより惜みてしはさ意有也といへり、猶考べし
安豆左由美。欲良能夜麻邊能。之牙可久爾。伊毛呂乎多氏天。左禰
あつさゆみ、よらのやまへの、しげかくに、いもろをたて、さね
度波良布母
どはらふも

あつさ弓枕詞、此山はしられず、しげかくにはしげきを延いふ也、いもろは妹等也、是は女の男の許へ來たる也、さねどのさは發語にて寢所也、其寢所の塵を拂て、妹が來れるをよろこぶま也

安都佐由美。須惠波余里禰牟。麻左可許曾。比等目乎於保美。奈乎
あつさゆみ、すゑはよりねん、まさかこそ、ひとめをおほみ、なを
波思爾於家禮
はしにおけれ

あつさ弓枕詞、まさか上に出、なを汝を也、妻問に來し男に心はよれど、また其の方へ入らすべきはどならねば、端の簀の子などにをらするを云也

柿本朝臣人麻呂歌集出也

楊奈疑許曾。伎禮婆伴要須禮。余能比等乃。古非爾思奈武乎。伊可
やなぎこそ、さればはえすれ、よのひとの、こひにしなを、いか
爾世余等曾
にせよとぞ

柳は伐てもとくひこばえの生る物なればいへり、世の人とは則我をいふ、卷七拉歌
あられふりとほつあふみのあと川柳刈れりとも又もおふとふあと川柳

乎夜麻田乃。伊氣能都追美爾。左須楊奈疑。奈里毛奈良受毛。奈等
をやまだの、いけのつゝみに、さすやなぎ、なりもならずも、など
布多里波母
ふたりはも

柳枝はさすによく根づきて生榮ゆ、其生をなるといひて、戀の成にいひなせり、さて我中の終に成ぬとも、もしならずとも、汝と吾心はかはらじといふ也

於曾波夜母。奈乎許曾麻多賣。牟可都乎能。四比乃故夜提能。安比
おそはやも、なをこそまため、ひかつをの、しひのこやでの、あひ

波多家波自

はたけはじ

遅くとも速くとも汝をこそまため也。こやでは小枝也。たけはじはたがはじにて
椎の枝さしかはし繁り合を、男に逢にいひかけたりと翁いはれき。宣長は椎は春
を過て、夏秋までもよく芽の出て小枝となる物なる故に、遅くとも逢んのたどへ
にせる也。或本の時は過とも同じく、春芽の出る時は過ても芽の出るを以た
とへたりといへり

或本歌曰、於曾波也母、伎美乎思麻多武、牟可都乎能、思比乃佐要太能、登吉波須具登
母

右にいへる宣長が説によるべし

兒毛知夜麻。和可加做流氏能。毛美都麻氏。宿毛等。和波毛布。汝波
こもちやま、わかかへるでの、もみづまで、ねもとわはもふ、なは
安村可毛布
あどかもふ

こもち山地名也。若かへるでは、春楓の芽の張れるをいひて、さて秋もみぢする

までもといふ也。下は寝んと我思ふを汝は何とかおもふと問なり、和名抄雞冠木
祝倍天乃木、辨色立成云、鶏頭樹
加比留提乃木、今案是一木名也、卷八吾やどに黄髮蝦手とよめり

伊波保呂乃。蘇比能。和可麻都。可藝里登也。伎美我伎麻左奴。宇良毛
いははろの、そひのわかまつ、かぎりや、さみがさまさぬ、うらも
等奈久毛
となくも

上に伊香保呂能蘇比乃波里波良とよめるに似たり、其岨の方の野の小松原まで
を限にて、外は崖なれば、そひの若松限りといへりと聞ゆ、此伊波保の波は何な
どの字の誤れるにて、伊何保にや有つらん、次の歌の多知婆奈乃といへるも、東
にては武藏の橋樹郡の外は聞えぬからは、武藏なるべし、其次の安波乎呂も安房
國の岳と聞え、前後必國所の知られぬを集めしともいふべからず、かれ右は上野
のいかはとすべし、さて上は限りといはん序にて、男の絶しにたどふ、うらもと
なくは心もとなく也と翁の説也、宣長云上二句限りの序にはよしなくさこゆ、此
序いと心得がたきを、しひて試にいはい、若松を吾待にとりて、限とやわが待君
が来ぬといへるかといへり

多知婆奈乃・古婆乃波奈里我・於毛布奈牟・已許呂宇都久志・伊氏
たちばなの、こばのはなりが、おもふなん、こゝろうつくし、いで
安禮波伊可奈
あれはいかな

和名抄武藏橋樹郡橋樹^{多知}是也、古婆も里の名なるべし、はなりは童女のうなる
はなりをいふ事上に出、おもふなんはおもふらん也、東歌にらんといふをなん
といへる例これかれ見ゆ、うつくしは愛る也、いであれはいかなは乞吾は往ん也

可波加美能・禰自路多可我夜・安也爾阿夜爾・左宿左寐氏許曾・已
かはかみの、ねじろたかや、あやにあやに、さねさねてこそ、こ
登爾氏爾思可
とにでにしか

かはかみとて河のべなと云意也、根白高がやは、川の岸に生繁れるが、水高き時洗
はれて、本の白く見ゆるを根白といふならん、さてかどあど音通へば、かや、あ
やと言を重ねたる序也、あやにはあなといふに同じく歎く詞にて、言を重ねいへ
り、さは發言、寢に寢てこそ人言にいひ出られたれと也、可は清て、上のこそとい

ふを結へり

宇奈波良乃・根夜波良古須氣・安麻多阿禮婆・伎美波和須良酒・和
うなばらの、ねやはらこそすげ、あまたあれば、さみはわすらす、わ
禮和須流禮夜
れわするれや

此海ばらの海邊をいへり、やはらは契沖云、海際に生たる菅は潮にあひて根の和
らかなるをいふといへり、又さいばらに、貫川のせいのやはら手枕と云やはらは
泥の事をいふとみゆれば、今もやはらは泥にて、且其泥に生る菅なれば、寢和ら
こ菅といひなして、うるはしさやはらだの妹をそへたる歎、あまたあれば、古
今集に目ならぶ人のあまたあればといふにおなじ、わすらすは、忘るのるを延言
也、わするれやは、わすられずと返る詞也、わすれむやといふに同じ

乎可爾與世・和我可流加夜能・佐禰加夜能・麻許等奈其夜波・禰呂
をかによせ、わがゝるかやの、さねがやの、まことなこやは、ねろ
等倣奈香母
とへなかも

をかによせは岡に著^{ツキ}よりて也、さねがやは、さは例の發語にて、根萱也、それに寢を添、且末の句へかゝる、なごやは卷四蒸食奈胡也我下丹ねたれども、古事記牟斯夫須麻爾^{ニコヤガシマコ}古屋賀斯多爾^{コヤカシタニ}と有も同じ、ねろとへなかもはねんといはなくもにて、まことになごやかにはねんといは無と、つれなきを恨む也と翁はいはれき、宣長云岡によせのよせは岡へはかゝらず、岡はたゞかやを刈る所をいへるのみ也、さて萱を女にたとへて、よせ刈るとは引よせなびかせて刈る也、たとへたる意は、女を我方へよせなびかせんとすれども也、大平云さねがやとはよくなびきなえたる萱といふ也、なえくとなびけども、まことには寢んといはぬかも也といへり、此説にてまこといふ事たしか也といへり

牟良佐伎波。根乎可母乎布流。比等乃兒能。宇良我奈之家乎。禰乎
むらささば、ねをかもをふる、ひとのこの、うらがなしけを、ねを
遠做奈久爾
いへなくに

紫草は根もて衣を染る事をなしはたす物也と先いひて、吾は寢る事をなしはた

さぬをいはん料とす、うらがなしけをのけは、きに通ひて、心に深く愛る也、ねを
らへなくには、戀れども共寢する事をなし果さぬ也、乎做は卷五むつき立春の來
たらばかくしこそ梅を折つゝ多奴之岐乎倍米とよめるは樂みを極めく也、祝詞
に稱^{ニゴトナヘ}辭^{ハハコト}竟^{ハハコト}奉^{ハハコト}といふも、神の御徳を稱へ盡し、崇め事を盡し果す也

安波乎呂能。乎呂田爾於波流。多波美豆良。比可婆奴流奴留。安乎
わはをろの、をろたにかはる、たはみづら、ひかはぬるく、あを
許等奈多延
ことなたえ

わはを安房國の岳なるべし、ろは助辭、其岳の麓の田に生る也自ら生たるなれ
ばおはるといへり、たはみづらは玉かつらに同じかるべきか、たわむ事と思ふは
假字違へり武藏の多摩川を多婆川と唱ふる如く、摩と婆の濁音と常に通へり、み
づらは眞蔓なれば、即玉かつらをたはみづらともいふなるべし、末はいひ通はず
言の絶る事なけれ共かつらを引が如く、遠長かれといふ也、ひかはぬるくの詞
上にも出、わをことなたえは、吾を言莫絶也、なたえそといふべき、智を畧は雲も
なたな引なとの例也、たはみつゝの事翁の説なれど猶あらんか考べし

和我目豆麻。比等波左久禮村。安佐我保能。等思佐倍已其登。和波

わがまつま、ひとはさくれど、あさがはの、としさへこゝと、わはさ
佐可流我倍
かるがへ

まつまは眞妻也、あさがはのと有はよしなし、安良多麻能などの草より誤れるな
らん、已其登はこそと訓て一年にさへ來すとも、我は思ひはなる、心あらしと
さへるならんと翁はいはれさ、されど前後皆草をよみて、此末にかは花のこひて
かぬらんとつふも、女をかは花といひたれば、これも朝がほを則女の事にたとへ
よめるなるべし、さてこゝとこゝたと同じ語とすべし、こゝばくの年へて我はさ
かるかは、さかりはせずといふ意也、宣長云すべて古歌には句を入れかへて心得
べき例多し、此歌三の句を初句の上におきて見べし、近く同じ句法の例此末に、
なやましけいとつまかもよこ舟の云といふも、三の句は初句の序也、考合す
べし、目豆麻はめつまと訓て、目につきて思妻也、朝貞の花の如き目妻といふ也
といへり、是然るべし

安齊可我多。志保悲乃由多爾。於毛徹良婆。宇家良我波奈乃。伊呂
あせかいた、しほひのゆたに、おもへらば、うけらがはなの、いろ
爾氏未也母。

にでめやも

舊訓あさかどあれど、齊をさのかなに用たる例なし、東に有地名ならん汝干は海
上のどかに、見る目寛かなるを、其汝干の如く、ゆたかにのどかにおもは、色に
は出しを、顔て思ふより顯はれたりと云也、うけらは既に由

波流徹左久。布治能宇良葉乃。宇良夜須爾。左奴流夜曾奈伎。兒呂
はるべさく、ふちのうらばの、うらやすに、さぬるよぞなき、ころ
手之毛倍婆
をしもへば

うらばは未葉也、上はうらやすといはん序也、うらは心也、ころをしもへばは手
等を思へば也、後撰集に春日さす藤のうらばのうらどけて君しかもは、我もた
のまんとよめるは、此歌をやおもへりけん

宇知比佐都。美夜能瀬河泊能。可保波奈能。孤悲天香眠良武。伎骨
うちひさつ、みやのせがはの、かはばなの、こひてかぬらん、さぞ
母許余比毛
もこよひも

うちひさつ枕詞、うちひさすといふすとつを通はせいふ也。卷十三打久津三宅の原ともよめり、かは花は顔よき妹に譬へたるか、さぞは昨夜をいふ此序穩ならず、考べし、かは花翁云おもたかをいふにや、かれが葉は人の面の高きが如なれば、面高とも名付いふ意を枕ざうしにもいひつ、又此下にみやしろのをかべに立るかほが花、卷八高まどの野べのかほ花といふは權をいふべし、權むくげ也といはれき、或人は今畫顔といふものならんといへり、いづれもより所なし

爾比牟能。許騰伎爾伊多禮婆。波太須酒伎。穗爾氏之伎美我。見にひむろの、こどきにいたれば、はだすき、はにでしきみが、み延奴已能許呂

えぬこのころ

翁云こどきは言辭也、いたれば、其時に成しかば也、新室の賀詞の事既にいへりはだすき枕詞、未は妹が家を新に造りて、こどぶきすとて人は多くつとへど、吾と相思ふ事の願はれし君は、かへりては、かかりて見え來ぬをおもひてよめるなるべし、といはれき、宣長云、こどきは蠶がひの時節也、にひむろは古へは年こがひする室を新にたて、せしなるべしといへり、こどきに至ればといへるは言辭に似つかずやわらん

多爾世婆美。彌年爾波比多流。多麻可豆良。多延武能已許呂。和我たにせばみ、みねにはひたる、たまかつら、たえんのこころ、わが母波奈久爾もはななくに

卷十一山高み谷べにこへるとて、末異に、卷十二丹波路の大江の山のさねかつらとて、末こいとひとしきもあれど、各他人の歌とはみえたり、いせ物がたりには少しかへてのせたり

芝付乃。御宇良佐伎奈流。根都古具佐。安比見受安良婆。安禮古非しばつきの、みうらさきなる、ねつこぐさ、あひみずわらは、あれこひ米夜母めやも

和名抄相模三浦郡三浦郷と出て今も在、芝付といへる所もそこには無か、問べしねつこ草知らず、其寝するを相見ともいふ故に序とせしちらんと翁の説なり、されど猶さだかならず考べし

多久夫須麻。之良夜麻可是能。宿奈做杼母。古呂賀於曾伎能。安路

たくふすま、しらやまかせの、ねなへども、ころがおそぎの、あろ
許曾要志母
こそえしも

たくふすま枕詞、此歌東人の旅にてよめるとみゆれば、越の白山の邊へ行てよめ
るなるべし、白山風の夜寒さに寝がたけれど、妹が形見の衣の有を着ればよしと
いへり、於曾伎は袈衣オウシギにて表衣シヤクをいふべし、かの於須比とは異也

美蘇良由久・君母爾毛我母奈・家布由伎氏・伊母爾許等杼比・安須
みそらゆく、くもにもがもな、けふゆきて、いもにことひ、あす
可徹里許武
かへりこん

ものいふをこといふといふ、防人の歌ならん、卷四み空行雲にもがもな高く飛鳥
にもがもなわす行て妹にことひ言爲に妹も事なく云々

安乎禰呂爾・多奈婢久君母能・伊佐欲比爾・物能安乎曾於毛布・等
あをねろに、たなびくもの、いさよひに、もの、をぞかもふ、と
思乃許能已呂

安能下
術文ハ

のこのころ

青嶺也 呂は助辭、上は雲の去もやらず懸りて有をもて序とせりとしのこのこ
ろは此年ころをといふに同じ、物能の下安は術文也

比登禰呂爾・伊波流毛能可良・安乎禰呂爾・伊佐欲布久母能・與曾
ひとねろに、いはるものから、あをねろに、いさよふくもの、よそ
里都麻波母
りづまはも

ひとねは一嶺、ろは助辭也、ものからはものながら也、あを嶺ろにいさよふ雲は
女の心定らぬ譬へ也、歌の意は、女の心いさよひていまだ不逢ものを、ひとつぞ
といはるゝ事をわびしくおもへる也、一嶺の嶺に實は用なけれども、青嶺といふ
につきて一嶺とはいへる也、上のいかはねに雨雲いつきといへるにも似たり

由布佐禮婆・美夜麻乎左良奴・爾努具母能・安是可多婆牟等・伊比
ゆふされば、みやまをさらぬ、にぬぐもの、あせかたえんと、いひ
之兒呂婆母
しころはも

美山は眞山にてはむる辭のみ、にぬ雲は布引たらん如く棚引雲を云、上にもぬ能を爾能といへり、高き山の夕の布雲の如く、我中何ぞや絶る時あらんといひし妹の、絶て後に男の思ひ出て歎く也

多可伎爾爾。久毛能都久能須。和禮左倍爾。伎美爾都吉奈那。多可たかきねに、くものつくのす、われさへに、きみにつきな、たか爾等毛比氏ねともひて

能須はなすにて著如く也、雲に依てわれさへとはいへり、つきなはつきなんと願ふ意、結句は君を其高嶺と思ひてといふ也

阿我於毛乃。和須禮牟之太波。久爾波布利。爾爾多都久毛乎。見都わがおもの、わすれんしだは、くにはふり、ねにたつくもを、みつ追之努波西いしぬばせ

我面のわすれん時は也、之太は時といふ事によめる例上に見ゆ、翁はわすれりし給は、也といはれつれどよからず、卷十一面形の忘るとならばといへるに同じ

く逢はで年經たるさま也、嶺の雲は面形に似る物ならねど、遠き境にては、雲のみ形見なれば、しかいへり、くにはふりは雲の國に溢る、斗ひろごりたるをいふ、ねにたつは嶺に立也

對馬能爾波。之多具毛安良南敷。可牟能爾爾。多奈婢久君毛乎。見つしまのねは、したぐもあらなふ、かんのねに、たなびくもを、み都追思怒波毛つしぬばも

契沖云したぐもは下雲也、あらなふはあらくなく也、下に雲はなく、上の嶺にたな引雲を見てしのばんとよめる也といへり、或人あらなふはあなるの意といへり、翁の云、はしたぐもあらなふにて、はしたぐは細痛の略也、くはしとははむる言にて、はしき妻などいふも是也、痛は強くいふ辭のみ、あらなふは吾行對馬嶺の雲は心愛くしともあらぬといふ也、かんのねは下に足柄のみ坂を神の御坂ともよめれば是奇らんか、是は防人の別る、時、上の歌を妹がよみしにこたへたるならん、吾行ん對馬の嶺の雲を見ては形見ともおもはじ、た、東の神の嶺の雲を遠く見てしのばんといふ也、筑紫より東の嶺の雲は見えざれどしかいふが情也とつばらにいはいはれつれど、はしたぐといふ詞の例無、さて具の濁音を書れば、此説

かなへりともおぼえず、猶梨沖が説によるべし、怒官本勢に作、波を一本婆に作る、共に用べし

思良久毛能・多要爾之伊毛乎。阿是西呂等。許已呂爾能里氏。許しらくもの、たえにしいもを、あせゝると、こゝろにのりて、こ已婆可那之家
いばかなしけ

雲は必絶くなればまくら詞とせり、あせゝるとは、何とせんとして也、こゝろこいばくを略いへり、家は伎に道はしいへり。

伊波能倍爾。伊賀可流久毛能。可努麻豆久。比等曾於多波布。伊射いはのへに、いがゝるくもの、かぬまづく、ひとぞおたばふ、いざ禰之賣刀良
ねしめとら

是は三の句より下は落失しならん、本末かけ合す、可努麻豆久云々の句は、上の上野歌の伊香保呂にわまぐもいつぎといへる歌の句にて、其歌はさこえたり、しかれば此末の句ども亂たる本にかく有しならんを校合せし人よくも心得ざりし

ものなるべし、正しき本を待のみ

奈我波伴爾。已良例安波由久。安乎久毛能。伊氏來和伎母兒。安必ながはゝに、こられあはゆく、あをぐもの、いでこわぎもこ、あひ見而由可武
みてゆかん

こられは噴らるゝ也、あはゆくは吾は行也、妹が許へ來たる男を、妹が母聞つての、しりければ、歸るとてよめる也、あを雲の枕詞、いでこははしなどへしばし出來たれと也

於毛可多能。和須禮牟之太波。於抱野呂爾。多奈婢久君母乎。見都おもがたの、あすれんしだは、おはのろに、たなびくゝもを、みつ追思努波牟
いしぬばん

大野ろのろは助辭にて廣野をいふ、是は此上に阿我於毛乃云とて出たる歌の或本なるべし、されどかれは我面を思ん時は、雲を見てしぬばせと人にいひ、是は人の面を思ん時は、我れ雲を見てしぬばんといふにて、意異也

可良須等布。於保乎曾籽里能。麻左低爾毛。伎麻左奴伎美乎。許呂
からすとふ、おほをそどりの、まさでにも、きまきぬきみを、ころ
久等曾奈久
くとぞなく

からすとふは鴉といふ也、手曾は常言に宇曾といふに同じく、偽いふ事ならんか
らすといふ大偽鳥といふ意也、卷三相見ては月もへなくに戀といは、手曾呂と
われをおもはさんかるといふも偽ぞとおぼさんかといふ也、兎を乎佐伎現を乎
都といふか如し、於曾の風流士、於曾や此きみななどは鈍く心遅き事にて、かな
も於曾なればこれとは別也、まさでは真定也、ころくは鴉のころくころくと鳴こ
有を子等來と聞なして、君が來るやと待にかひなければ大偽鳥ぞと鴉を罵也後
に鶯の聲を人くと聞なせるも此類也

伎曾許曾波。兒呂等左宿之香。久毛能宇倍由。奈伎由久多豆乃。麻
さそこそは、ころとさねしか、くものうへゆ、なきゆくたづの、ま
登保久於毛保由
どはくおもはゆ

伎曾は昨夜、ころは子等也、さは菟語、雲の上より鳴行鶴の如くといふをこめた
り、ま遠くのまは真也

佐可故要氏。阿倍乃田能毛爾。爲流多豆乃。等毛思吉伎美波。安須
さかこえて、あべのたのにも、ゐるたづの、ともしきくみは、あす
左倍母我毛
さへもがも

駿河内屋の坂の東に阿部川有、卷三阿部の市道とよめるは此河の東也、上は序に
て、群るをはいはず、たいめを二つをるをもて、芝を壁としてさてたましく、衆し
男を、いかでかく日並べて來んよしもがなと思ふ也と翁はいはれき、宣長云此芝
きはうらやましき也、毎日來ぬ日なく來居る鶴を羨て、わが男も毎日明日も來れ
かしと云也といへり

麻乎其母能。布能未知可久氏。安波奈做波。於吉都麻可母能。奈氣
まをこもの、ふのみちかくて、おはなへば、おきつまがもの、なげ
伎曾安我須流
きぞわがする

顯宗紀耶賦能之摩智枳、後に十ふの菅などもなごいへる、皆ゆひめあみめを節といふを略て布といへり、薦のふのしげきを近きといへり、ふのみのみは、近きへ係りて、このふの如く近きのみにてあはぬといふ也、沖つ眞鴨ははるけき譬へ也、近き物と遠き物を對へいへり、翁は未は末の誤にて、間近くならんといはれつれど、のみと有かたまされりまをこゝはまもをも發語のみ

誤敵ニテ

水久君野爾。可母能波抱能須。兒呂我字倍爾。許等於呂波做而。伊みくいぬに、かものははのす、ころがうへに、ことおろばへて、い

麻太宿奈布母
またねなふも

武藏の秩父郡に水久具利といふ里有、もし其所の沼をいふか、ははのすは鴨の羽ふきの如くといふ也、牠に群て羽ふきするは開驚かる、物也、夫伎の約備なるを抱に轉したり、ことおろばへは言驚ばへて也、於是於杼の約なれば、驚くを於呂といへり、波倍は付いひ、言を延る詞、ねなふはねぬを延言、もはかもの意、さいばらに、あしがさまがきてふこすとおひこすと、いろける此家の弟よめ親にまうよこしけらしもといへるが如く、男の忍ひ來んぞと聞て、家こそりと、ろさ願ぐといふ也と翁はいはれき、され強ごとにやあらん、宣長云みくいぬのぬは

野也ははは備也、鴨は足短くて陸行不便なるを備といふ也、さて上二句は於呂の序也、鴨のありくはおろかにて、備が如くなる意也、うへにはうはさに也、只うはさに言のみねんといひて、いまだねぬと也、おろはおろそかにの意也といへり、卷九長歌に辭緒不延と有も、こののをはへすとよめり、こゝとは意異なれども詞相似たり

奴麻布多都。可欲波等里我栖。安我許已呂。布多由久奈母等。奈與ぬまふたつ、かよはとりがす、あがこゝろ、ふたゆくなもと、なよ母波里曾禰もはりそね

沼二つく通ふ水鳥のすみか也、さて鳥がすみかの如くと心得べし、未は我心を二方に通はすらんと思ふ事なかれといふ也、卷四にあふよわはぬよふたゆく、同うつせみの世やも二行なといふも、轉ては同じ意に落めり、ゆく奈母は行らん也、奈與もはりそねは勿思ひそ也、もはりはおもひのおを略きひを延たり、ねは辭、此奈與は汝よといふ事ともすべけれど勿思ひそといふ類の勿を略きて、曾とのみいふ例なければ、汝よとするはわろし

於吉爾須毛。乎加母乃母已呂。也左可杼利。伊伎豆久伊毛乎。於

久一

おきにすも、をかものもころ、やさかどり、いさづく、いもぞ、お
伎氏伎努可母
きてさぬかも

沼にても遠く深き所を澳といふ、すもは湏牟也、手は小、母古呂は如くといふ、言
やさかどりは八十量の長息つく鳥といふ也、其やさか鳥といへるはには鳥なる
べし、有が中に久しく水底にかづき入て居鳥なれば也、さてやさか鳥は只息づく
の枕詞にて、歌の意にかはらず、古歌には此類ひ有、をみなへし、喉野のはきな
どの如し、小鴨の如なるやさか鳥といふ意にはわらず、二の句より四の句へつ
けて心得べし、防人の別なるべし、一の久は衍文也

水都等利乃。多多武與會比爾。伊母能良爾。毛乃伊波受伎爾氏。於
みづどりの、たゝんよそひに、いものらに、ものいはすきにて、お
毛比可禰都毛
もひかねつも

水鳥の枕詞、よそひは、萬にわたうていふ、能は妹なねなといふに同じく貴む言
也此末の詞は上にも下にもあり

等夜乃野爾。手佐藝禰良波里。手佐乎左毛。禰奈倣古由惠爾。波伴
とやのぬに、をさぎねらはり、をさくも、ねなへこゆゑに、は
爾許呂波要
にころはえ

上はをさくといはん爲の序也麿をわはせんとて、柴なををさしてうかいひ居
る所を、田舎にて鳥屋といふ、それを轉じて歌とる爲にするをもしかいふか且さ
るわざする所を即鳥屋の野といふべし、又和名抄下總印幡郡鳥矢郷有、そこか
をさぎねらはり、は兎ねらひ也、をさくは何にても専らなる様の事にいへり、
物語ぶみに多く有も同じ意也、末は専ら相寢し事もなき妹ながら、其母に嘖られ
しと也、要は禮と通じ用ふ、是も右になが母に己良例わは行といふ如く、母が罵
を聞て、徒に歸る道にてよめるなるべし

左乎思鹿能。布須也久草無良。見要受等母。兒呂家可奈門欲。由可
ごをしかの、ふすやくさむら、みえずとも、ころがかなとよ、ゆか
久之要思毛
くしえしも

上は譬也、よし妹は見えずとも、その門邊を行けば、下心よしといへり、可奈門既にいへり、ゆかくはゆくを延言、家は我の誤なるべし

伊母乎許曾。安比美爾許思可。麻欲婢吉能。與許夜麻徹呂能。思之
いもをこそ、あひみにこしか、まよびきの、よこやまべろの、し、
奈須於母徹流
なすおもへる、

まよびきの枕詞、妹が家の母など、忍ひ男をば山田の鹿の如く思へるといへり、上に小山田のし、田守ごと母がもらすともよめり、横山べろのべは方にて、ろは助辭也、此横山は地名にはあらず

波流能野爾。久佐波牟古麻能。久知夜麻受。安乎思努布良武。伊徹
はるのぬに、くさはむこまの、くちやます、あをしぬふらん、いへ
乃兒呂波母
のころはも

駒の若草はむがをやみなさをもて譬とす、妹が今は待わびて、頻に我うへをいふらんと防人のよめるならん

比登乃兒乃。可奈思家之太波。波麻渚杼里。安奈由牟古麻能。乎之
ひとのこの、かなしけしだは、はますどり、あなゆむこまの、をし
家口母奈思
けくもなし

かなしけしだははかなしく思ふ時は也、はます鳥枕詞、あなゆむは、足惱む也、上の鴨のははのすといへる如く、水鳥は陸行不便にて足なやむ如く見ゆるものなればたとへとせり、さて妹をかなしく思ふ時は、馬の足の勞れをもいとはす通ひ來といふ也と宣長がいへるぞよ

安可胡麻我。可度氏乎思都都。伊氏可天爾。世之乎見多氏思。伊徹
あかこまが、かどてをしつ、いでがてあ、せしをみたてし、いへ
能兒良波母
のころはも

上二句は馬の馬屋の戸口を出んとすれどもえ出ぬ意にて出がてといはん爲の序也、見たては今も旅立時にいふ言にて、見つたしむる也、さて其時妹が愁しささを思ひ出てなげく也

於能我乎遠。於保爾奈於毛比會。爾波爾多知。惠麻須我可良爾。古
おのがを、おほになおもひそ、にはにたち、ゑますがからに、こ
麻爾安布毛能乎
またおふものを

於能は妹がみつから巳といふ也、乎は即夫をいふおほになおもひそは、馬の心にもおほろかにおもふ事なかれと教ふる也、にはにたち云くは、男の早く到て悦ぶ也、乗來し夫の悦ひるむからに、馬をもほめてよろしく飼なすれば、いつもわがせをおろかに思はずて、いそぎ來たれといふならん、安布とは馬に饗するをいふと聞ゆ、布倍音通へば也

安加胡麻乎。字知氏左乎妣吉。已許呂妣吉。伊可奈流勢奈可。和我
わかごまを、うちてさをびさ、こころびさ、いかなるせなか、わが
理許武等伊布
りこんといふ

さを引のさは發語にて、をびさは俗言にをびさ出すなどいふに同じ言なるべし馬を打て引出し或は引とゆめするを、心を引みるに譬ふ、弓に引みゆるべみさ

文ハ誤教般
衍字ニナ

といふにひとし、さまくと吾をこころみもてあそびて後、わが許へ來んといふはいか斗の心もたる男にやと女のふづくめるさま見ゆと翁いはれき、宣長云さをびさは緒牽にて、馬の綱を引也、さて上二句は心びさのひきをいはん序のみ也わがりこんといふはたゞ我心を引見ん爲のみにこそわらめ、さる事いふはいかなる男ぞといふ也といへり、猶考べし

久傲胡之爾。武藝波武古字馬能。波都波都爾。安比見之兒良之。安
くべごしに、ひぎはむこ、まの、はつくに、あひみしこらし、あ
夜爾可奈思母
やにかなしも

くべは馬塞の籬也、上に此一二句同じくて、三句より下異なる有、其所にいへり、かきの外の麥を頭さし延て昨に、口のいさゝかにとゞくをいふ、字は衍字にて、古馬なるべしはつくは集中に小端とも書て、端と端のわづかにとゞくをいへば、いといさゝかなる事にとれり

或本歌曰、宇麻勢胡之、牟伎波武古麻能、波都波都爾、仁必波太布禮思、古呂之可奈思母

此うませもくべに同じ、にひばたは新磨也

比呂波之乎。宇馬古思我爾氏。已許呂能未。伊母我理夜里氏。和波
ひろげしを、うまこしがねて、こゝろのみ、いもがりやりて、おは
已許爾思天
こゝにして

此ひろばしくさく説有、先づ翁の説、廣橋ならば渡がたからじ、然は呂は良の
意にて、一枚の打橋をいふべしといはれき、契沖は廣さ一尋斗の橋を云べしとい
へり、宣長は此橋は間をおきて石を並べたる石橋にて、其間斗の廣さを云なるべ
し、さて妹がりやりての氏は、豆の誤にて、やりつならんといへり、猶考べし
或本歌發句曰、手波夜之爾古麻乎波左佐氣
山に小木茂さ中へ馬のされ走上りて、急げどもせんかたなく在はどの心也、はさ
くげは走らせおげを約たる也

安受乃宇傲爾。古馬乎都奈伎氏。安夜抱可等。比登麻都古呂乎。伊
あすのうへに、こまをつなぎて、あやはかど、ひとまつころを、い
吉爾和我須流

きにわがする

あすは同塞とて、田ごとの間のへだてをいふと翁はいはれき道麻呂云字鏡に珊
崩岸也、久豆禮、又阿須と有是也、俗に云がけの危き所也といへり、是なるべし、
あやはかどは危くわれども也、以下にあやはどもと有と同じ、麻都は都麻の下
上になりたる也、此下に比登豆麻古呂とよめり、他妻子等也、いさは命也、しかれ
ばいさのをといふに同じく、命かけたる思ひ也

左和多里能。手兒爾伊由伎安比。安可故麻我。安我伎乎波夜美。許
さわたりの、てごにいゆきあひ、あかごまが、あがきをこやみ、こ
等登波受伎奴
と、はすさぬ

さわたりは所の名也、駿河にも此名有、思ふ妹にたま〜行逢しに也、手兒は既に
出、あがきは足撥也

安受倍可良。古麻乃由胡能須。安也波刀文。比登豆麻古呂乎。麻由
あすべから、こまのゆこのす、あやはども、ひとまつころを、まゆ
可西良布母

かせらふも

右の安受のうへにの歌の或本歟、同歌のいさゝか進へるのみ也。あすべのべは方にて、からは自也。ゆこのすはゆくなすにて行如の意也。あやはともはあやふくわれども也。まゆかせらふものまは發語にて、ゆかしくせるといふなるべし

佐射禮伊思爾。古馬乎波佐世氏。已許呂伊多美。安我毛布伊毛我。

さいれいしに、こまをはさせて、こゝろいたみ、あがもふいもが

伊徹乃安多里可聞

いへのあたりかも

はさせては走らせて也、石ふむ道は馬の足のわやめば、乗人心いたくおもふを譬たり、卷四さほ川のさいれふみわたりぬば玉のこまのくる夜はとしにもあらぬ

か

武路我夜乃。都留能都追美乃。那利奴賀爾。古呂波伊徹杼母。伊末

むろがやの、つるのつゝみの、なりぬがに、ころはいへども、いま

太年那久爾

だねなくに

重之家集に陸奥にこづるの池の堤といふ有、その比の歌に、むろのやしきともよみしかば是は陸奥に有地ならん、東には沼池などを夜といへり、後に室の八島は下野とすれど、必とも定がたし、此歌によればみちのくか、此比此堤をなし終りけん、を戀の來るによせたる也、凡成ぬるといへど、まだねも見ぬといふ也。翁はいはれつれど、こゝを室のやしきとせんは強言なるべし、契沖は甲斐に都留郡有、つるの堤はそこなどかといへり、猶考べし、がにの詞は既多出

阿須可河泊。之多爾其禮留手。之良受思天。勢奈那登布多理。左宿

あすかがは、したにされるを、しらすして、せなゝとふたり、さね

而久也思母

てくやしむ

あすかいは、大和の外には聞えず、もしこの可は太の誤にて、あすた川かと翁いはれき、重級日記古本にむさしと下つふさのあはひなるあまた川といへるゝあもはれし也、されどこゝに二首阿須可河とよみたれば、東にも大和と同名の川有しなるべし、した濁とは男の心のことならぬをいふ、せは夫にてなゝは妹名禰などのなねの詞に同じ、六帖と禰河は應はにこりて上すみて有けるものをさねてくやしむ

安須可河泊。世久登之里世波。安麻多欲母。爲禰氏已麻思乎。世久
あすかがは、せくとしりせば、あまたよも、あねてこましを、せく
得四里世波
としりせば

かく親などのせきとむると知てあらば也、あねてこましは率^{ヒキ}の寢て來らんもの
を也

安乎楊木能。波良路可波刀爾。奈乎麻都等。西美度波久末受。多知
わをやぎの、とらろかはとに、なをまつと、せみどはくます、たち
度奈良須母
どならずも

柳の芽の張る川門也、せみどは清水也、しみうはすみ水也、たちどならずは水
をは波す、汝を待とて立て土のみふみならして望みををいふ、立どのどはころ
の略言也

阿知乃須牟。須沙能伊利江乃。許母理沼乃。安奈伊伎豆加思。美受

あぢのすむ、すさのいりえの、こもりぬの、あないさづかし、みす
比佐爾指天
ひさにして

味龜の栖也、すさの入江攝津に有て、後に歌によみたれど、これは東國に有地名
なるべし、上句は、いふせき譬也母が加ふこのまゆごもりといふに心は同じ、元
曆本知を遅に作る

奈流世呂爾。木都能余須奈須。伊等能伎提。可奈思家世呂爾。比等
なるせろに、こづのよすなす、いとどきて、かなしけせろに、ひと
佐徹余呂母
さへやすも

鳴瀬也、ろは助辭、こづはこづみ也、其木くづの流れよる如く、多の人のいひやす
るにたどふ、いとどきては上に出

多由比我多。志保彌知和多流。伊豆由可母。加奈之伎世須我。和賀
たゆひがた、しほみちわたる、いづゆかも、かなしきせろが、わが
利可欲波牟

りかよはん

たゆひがた越前にある地名也、東にも有なるべし、いづゆかもは何所従歟也、もは詞、わがりは吾許也

於志氏伊奈等。伊禰波都可禰杵。奈美乃保能。伊多夫良思毛與。伎かしていなと、いねはつかねと、なみのほの、いたぶらしもよ、き曾比登里宿而ぞひとりねて

こはいと心得がたき歌也、翁試にいはれしは、初句強て、といひて也、さて稻つきなとわらわさすれば、身もといろきて、うまいしがたきにたどへて、さるわごせねと、昨夜たま〜夫子と寝ざればいねがたかりしといふか、是も賤女が事をかりていふならんこと上にいへるがごとし、いねつくは靱を杵とて臼に舂て米とするをいふ、なみのほのは神代紀に浪穂といへるに同じく、高浪の事也、いたぶらしもよは、卷十一甚振浪といへるにひとしく、いたはいたく也、卷十七にも伊多もすべなみといへり、さて浪の振動を心の動によすといはれき猶考べし

阿遲可麻能。可多爾左久奈美。比良湍爾母。比毛登久毛能可。加奈

あぢかまの、かたにさくなみ、ひらせにも、ひもとくものか、かな思家乎於吉氏しけをおきて

あぢかまは卷十一にも此下にもよめり、讃岐也といへり、さて浪は神代紀秀起浪穂、卷六白浪の伊開廻れるとよめる如く、立波を云、ひらせは所廣くさ浪のみして平らけきをいふべし、是はさき立浪を吾専ら思ふ男にたどへ平瀬をばおしなへたる男にたどへて、思ふ男をおきて、おはよそ人お紐解物かはと女のいふ也

麻都我宇良爾。佐和惠字良太知。麻比等其等。於毛抱須奈母呂。和まつがうらに、さわゑうらたち、まひとごと、おもはすなもろ、わ賀母抱乃須毛がもほのすも

此歌いと解がたし、先づ翁の説は、まつがうらは其男女の住所をいふ、佐和惠は騒にて、里人は言痛、家の内には占問なととして、こと〜しくさわをいへり、此下に曾和做可毛加米におはせんともよみて、此曾和は佐和に同じく騒意にて、惠は

辭也、まひとことの眞は發語にて、人言也、おもはずなるものは助辭にて、か
くいひさわざ、占問などするとも、それを思ふ事なけれ、吾思ふ心の如くと云也
抱は布に通、乃は奈に通へりといはれき、宣長云、此歌三の句より下はよくさこ
えたり、上二句心えがたし、下は人言のいひさわざ事をわがわびしくおもふ如く
君もさぞわびしくおもはずらんと女のよめる也、四の句なまはらん也東歌にら
んをなんといへる例多し、結句は吾思ふ如く也といへり、契沖は佐和恵は佐波敵
なるを詛れり、さばへは五月蠅也、うらだちはむらだち也、松が浦のうらをうけ
てうらだちとつゞくるのみならず、松の浦立に浪の如くむら立さはへなす人言
といふ心也、松が浦に五月蠅のむら立といふにはわらずといへり、是はいたく強
言也、とるべからず、されどかた／＼擧てよき考へを待のみ

安治可麻能。可家能水奈刀爾。伊流思保乃。許氏多受久毛可。伊里
わぢかまの、かけのみなどに、いるしはの、こてたすくもか、いり
氏禰麻久母
くねましを

湊にさし入潮のひゞきを人言のさわぐに譬、上に潮たるともいへり、許氏多受の
受は家の誤か、しからばこてたけくもかと訓べし、妹が夜床に入てねんに、さら

ば人言の痛けくもあらんかどわやぶむ意なるべしと翁いはれき、宣長云上の句は
入りての序也、入潮の入てとつゞけり、四の句久は之の誤にて、こてたすしもが也
こちたからずしもがなといふ意也、妹が床に入てねんに、人言のこちたからずも
がな也、といへり、かくても然るべし、元暦本禰を許に作るこまくは察らまく也
伊毛我奴流。等許乃安多理爾。伊波具久留。水都爾母我毛與。伊里
いもがぬる、とこのわたりに、いはぐゝる、みづにもがもよ、いり
氏禰末久母
てねまくも

潜事を古く清音に唱へたりと見ゆ、されば若くゝると上よりいひ下す故に、上を
濁れり、具久は久具の下上になれる也とおもふはかへりて非也、谷具久など同じ
例也

麻久良我乃。許我能和多利乃。可良加治乃。於登太可思母奈。宿莫
まくらがの、こがのわたり、からかぢの、おとたかしもよ、ねな
徹兒由惠爾
へこゆゑに

まくらがのこが既に^レ出加治加伊は其もと^レ同物同言なるを、こゝに可良加治といふを思へば、我朝にては一木して作る加伊のみ有しに、手束に他木を添て、今船といふ物、後から國より來し故に、此名有ならん、さてかぢの音を人言に譬へ、末はねもせぬ妹なるものをと也

思保夫禰能。於可禮婆可奈之。左宿都禮婆。比登其等思氣志。那乎
しほふねの、おかれはかなし、さねつれば、ひとごとしげし、なを
村可母思武
どかもしん

上にしほふねの並べてといへるは、湊又は磯などへよせ並べて在をいふなればこゝもといめて潮まぢする船をいふへし、さて時有て浮去をもて浮ことに冠らせたり、於と宇と通ひて浮れば也、續紀宣命に宇牟加志とも於牟加志ともいへるが如し、さてうかれつゝよそにして在ば悲し、さりとてねつれば人言繁し也と翁いはれき、宣長云おかれは置れば也、女をぬすしておければ也、船にはおくといふ事似つかはしからねど、乗らずして浦にいたづらに置て在舟を見て、それによそへてよめるなるべし、浮れば歌の意にうとし、さてなをどかもしんは汝を何ともせんにて、あを畧ける也といへり

奈夜麻思家。比登都麻可母與。許具布禰能。和須禮婆勢奈那。伊夜
なやましけ、ひとづまかもよ、こぐふねの、わすれはせな、いや
母比麻須爾
もひますに

なやましけのけはきに通、持舟の思とつゝくよしなきをおもふに、次の歌は人妻の舟にて遠く行をりの歌是は忍ぶ男のおくれぬてなげく心をいふなるべし、さて人妻は別るゝ時にもことも問がたく、わづらはしきもの哉といふ也、思れはせな、いはわすれもせねかしとねがふ詞にて、こぎ行舟の事を忘れんよしもがな、徒にかく思ひ増にといへるなるべしと細いはれき、宣長云こぐふねのはなやましき譬也、上にわが目妻人はさくれどわさがはのとよめる句法也、浪の上をいゆきさぐみなどいへる如く、舟をこぎ行とのなやましきよ、也、四の句はわすれはせずなにて、忘れぬ意也といへりわすれもせねかしの意とする時は、わすれはのはの言に叶はざればわすれぬ意とせんかた増るべし

安波受之氏。由加婆乎思家牟。麻久良我能。許賀已具布禰爾。伎美
わはずして、ゆかばをしけん、まくらがの、こがこぐふねに、きみ
毛安波奴可毛

もあはぬかも

わは心かもはあへかしと乞をかくいふ例也、女の船にて別行事有時、其女に逢男にいひやれるなるべし

於保夫禰乎。倍由毛登毛由毛。可多米提之。許曾能左刀妣等。阿良

かほふねを、へゆもともゆも、かためてし、こそこのさどびと、あら

波左米可母

はさめかも

船は艦舳の堅めを専らとして作るを事を知べき里人にいとよく口がためしに譬ふと翁いはれき、宣長は山毛といへるを思ふに、泊れる舟を綱にてつなぎかたむるなるべしといへり、許曾は地の名なるべし、もし曾は賀の誤にて、こがにや、此かもはかはの意也

麻可禰布久。爾布能麻曾保乃。伊呂爾低氏。伊波奈久能未曾。安我

まがねふく、にふのまそはの、いろにでし、いはなくのみぞ、あが

古布良久波

こふらくは

眞金は鐵をいふ、吉備中山には古も今も鑛を出す故に、まがねふく吉備といへるが如し、丹生は和名抄上野甘樂郡丹生郷有、こくにや、かの丹生にても、古しへ鑛をふきしか、爾布、は本赫土ホカの有故に所の名となりしならん、其丹土の色に出るをもて思ひを顯はすにやとふ、末は吾戀ふる心は言にいはぬのみぞといふ也

可奈刀出乎。安良我伎麻由美。比賀刀禮婆。阿米乎萬刀能須。伎美

かなとだを、あらかさまゆみ、ひかどれば、あめをまとのす、さみ

乎等麻刀母

をらまとも

かたとは上に出、則門田にて、家の門の前なる田をいふ、あらかさまゆみは荒木の弓也、初句の田よりあらかさまとつけ、其あらかさを荒木の弓にいひなして弓といふより引と三の句へつつけし也、されど是は初より四句まで田の事なる中に、弓の言を交へいふは古意ならねば、由美は阿幾の字などの誤れるならんか、田は春より馬鋏もてかさならずを荒かさといひ、次に苗を植る時するをこながさとも眞搔マカキともいへり、さてかくならし調へし時、早すれば、植がたくて、頻に雨を待ものなれば、そをもて序とせしなるべし比賀刀禮ば、日之照ヒノカれば也、あめを萬刀能須は雨を待如也、さみをらまともは君を待も也、上の刀は氏を通はし、下

二つの刀は都を通はしたり等は助辭也と翁の説也。大平が云、まゆみはまゆひと
はたらく言にて、まゆむは地の干わるゝ事と開ゆ、さればまゆみは地の干われて
と云事也、しかいふ故は、今いせの國人など、夏の早に畑つ物の枯るをまふと云
是早の時に限ていふ言なれば、まふはまゆむにて、地の干わるゝより出たる言な
るべし、又よめわるといふ言もあり、これもよめとゆみと同言なるべしといへ
り、猶よく考べし

安里蘇夜爾。於布流多麻母乃。宇知奈婢伎。比登里夜宿良牟。安乎
ありそやに、おふるたまもの、うちなびき、ひとりやぬらん、あを
麻知可禰氏
まぢかねて

夜は麻の誤にて荒磯アラシ回なるべし、宣長は夜は沼の誤歟、ありそまには必末と書て
麻と書る所なしといへり、玉藻の如く身をなよゝかにしてぬるらんと云也

比多我多能。伊蘇乃和可米乃。多知美多要。和乎可麻都那毛。伎魯
ひたがたの、いそのわかめの、たちみだえ、わをかまつなも、さぞ
毛已余必母

もこよひも

ひたがたは地名也、卷十二斐太の細江とよめる所にや、わかめは和名抄海藻イソ木
米俗用和布と有なるべし、其わかめの磯波のまゝに亂れなびくに、妹が思ひ亂る
ゝを添たり、多知は辭、美多要は亂れ也、まつなもはまつらん也、奈と良を通はし
いふ事東歌に多し

古須氣呂乃。宇良布久可是能。安騰須酒香。可奈之家兒呂乎。於毛
こすげろの、うらふくかせの、あどすゝか、かなしけこらを、おも
比須吾左牟
ひすごさん

武藏と下總のあはひの葛飾郡に小菅といふ所今有て、今は里中なれど此邊古へ
隅田川といひしあたりにて、古く河にも浦をいへれば、こゝをいふならん、わど
すゝかは、何と爲ととかといふ也、梓弓末に玉まきかくすゝぞといへるに同じ、さ
て浦吹風ウラハシのといふより終の句一かゝれり風は吹過る物なるによりて、何とせば
か、風の過る如く、妹が事を思ひ過さんやと、思ひのやるかたなきまゝにいふ也
可能古呂等。宿受屋奈里奈牟。波太須酒伎。宇良野乃夜麻爾。都久

かのころど、ねずやなりなん、はだすゝき、うらぬのやまに、つく
可多與留母
かたよるも

彼は思ふ妹をさす、古呂は兒等也、はだすゝき枕詞、すゝきの末とつゞけるなる
べし、うら野の山は地名ならん、つくかたさるもは月片倚也、男の妹がもとへ來
て入べき事を待伺ふほどに、夜更月かたふけば、かくて遂にねずやあらんとな
げり

和伎毛古爾・安我古非思奈婆・曾和徹可毛・加米爾於保世牟・已許
わぎもこに、わがこひしなば、そわへかも、かめにおほせん、こゝ
呂思良受氏
ろしらすて

翁說敵一本惠に作るをよしとす、そのゑは上の佐和惠と同じ詞を見ゆれば也、こ
ゝの意は家はもとより、里人もくさぐさいひさわき立て、遂には神の思ぞといひ
なさん、戀る心をば人はしらすしてといへりといはれき、されど穩ならず、加米
一本加未と有、いづれか是ならん、此歌解がたし、猶考べし

防人歌

於伎氏伊可婆・伊毛婆摩可奈之・母知氏由久・安都佐能由美乃・由
おきていかば、いもはまがなし、もちてゆく、あづさのゆみの、ゆ
都可爾母我毛
づかにもがも

妹を捨置て行は眞悲し、弓東にもわれかし、携へゆかんをと也

於久禮爲氏・古非波久流思母・安佐我里能・伎美我由美爾母・奈良
おくれるて、こひばくるしも、あさがりの、きみがゆみにも、なら
麻思物能乎
ましものを

防人の妻の右に答へし歌也、朝獵はたゞ弓をいはん爲のみにて、有なれし事もて
いへる也

右二首問答

佐伎母理爾・多知之安佐氣乃・可奈刀低爾・手婆奈禮乎思美・奈吉
ささもりい、たちしあさけの、かなとでに、たばなれをしみ、なき

思兒良婆母

しこらはも

かなどでは門出也、たばなれは手離也

安之能葉爾。由布宜利多知氏。可母我鳴乃。左牟伎由布徹思。奈乎
わしのはに、ゆふぎりたちて、かもがねの、さむきゆふべし、あを
波思奴波牟
ばしぬばん

肌寒き海路などにてはことにこひ慕ふべし、なをば、汝をば也、東にもかゝるう
るはしき歌まむ人も有けり

於能豆麻乎。比登乃左刀爾於吉。於保保思久。見都都曾伎奴流。許
おのづまを、ひとのさとおき、おほしく、みつゝぞさぬる、こ
能美知乃安比太
のみちのわひた

己が妻を隠して他の里に置し故、おぼつかなくて、長しき道の間をかへり見し
つゝ來しと也、旅に日を経て後によめる也

譬喻歌

安村毛徹可。阿自久麻夜末乃。由豆流波乃。布敷麻留等伎爾。可是
あどもへか、あじくまやまの、ゆづるはの、ふゝまるとさに、かせ
布可受可母
ふかすかも

あどもへかは何ぞといふ也、思は添たる詞、あじくま山しられとぞ、陸奥の阿武
久麻に似たる名也、ふゝまるは卷廿の東歌にちはのぬのこのてがしはの保、麻
例等といへるに言は同じくて、かれは妹が懐に含まる也、こゝは此若葉のひらけ
ざるを、戀のいまだしきはとりにへり、風ふかすかもは、まだしきはとには
あらずして、今と成て吹さわぐは何でふとぞやといふ也、古事記^{神武} 大后の御譬
歌に宇泥備夜麻許能波佐夜藝奴加是布加牟登頂

安之比奇能。夜麻可都良加氣。麻之波爾母。衣可多伎可氣。乎於吉
あしびきの、やまかつらかけ、ましびにも、えがたさかけ、をおき
夜可良佐武
やからさん

卷十九足引の山下日かげかづらけるといふに同じく、日蔭裏也、然るを日を略て
かげどのみいへるは卷十三うすの山影^{山を今}に説といへるが如し、又是を山かづらと
のみもいふは、古今六帖に三室の山の山かづらせん、古今集にあなしの山の山人
と、も見るかに山かづらせよと有是也、ましばにもは上にも、出しばくも得難
きは蔭かづらをとといふ也、おさやからさんは、奥山の老松などにのみ生る物なれ
ば、たやすくは得がたさを徒におさからすは、世に惜むべき事なるに對へて、ま
たも得がたかるべき妹を、あふよしなくて徒に戀ふるをいへり、ましばの詞は
上のおふしもとこのもとやまのましばにもといふ歌に、宣長が説を擧いへり其
説によらば波を清みて唱ふべき也猶考べし

手佐刀奈流・波奈多知波奈乎・比伎余知氏・乎良無登須禮村・宇良
をさとある、はあたらばなを、ひさよぢて、をらんとすれど、うら
和可美許會
わかみかも

をさとほ所の名なるべし、卷十九に天地にたらしめてわがおほさみしきま
せばかまたのしき小里とよめるは、住る所をへりくだりていふと聞ゆれば、こ
も地名にはあらずして、吾住里をいふか、又泊瀬小國などの小にて、たゞそへた

るか卷八わが宿の花橋のいつしかも玉に貫づくそのみなりなん、卷四うら若み
花咲がたき梅を植て人言繁み思ひぞわがするなといへる類ひ也、幼き女と戀ふ
る也

美夜自呂乃・緒可徹爾多氏流・可保我波奈・莫佐吉伊低曾禰・許米
みやじろの、をかべにたてる、かほがはな、なささいでそね、こめ
氏思努波武
てしぬばん

みやじろ所の名也、かほがはなは上に貞花とよめる也、色に出る事なかれ我も心
に籠めて慕はんと也

奈波之呂乃・古奈波伎我奈乎・伎奴爾須里・奈流留麻爾末仁・安
なはしろの、こなきがはなを、きぬにすり、なるゝまに、あ
是可加奈思家
せかかなしけ

こなき既に出、あせかかあしけは、何ぞや悲しき也、卷七すみの江の涉澤沼のか
きつたべにすり、つけ着ん日しらすもと云如く、妹にしたしみ逢を、色を衣に摺

付るに譬て、且したしむまゝに深く思はるゝは、いかでかく送はと日賤也、元曆
本古奈宜とせり

挽歌

可奈思伊毛乎。伊都知由可米等。夜麻須氣乃。曾我比爾宿思久。伊
かなしいもを、いづちゆかめと、やますげの、そがひにねしく、い
麻之久夜思母
ましくやしも

山すげの枕詞、卷七挽歌に吾せこそいづちゆかめと辟竹ササキのそがひにねしくいまし
くやしもといふに同じ

以前歌詞未得勘知國土山川之名也

右の中にも阿波乎呂對馬嶺など國明らかなるも有、又おしはかりに違ふまじき
も少なからぬを、おしこめて國土不知とせしもおぼつかなし、是も後人の註な
るべし

萬葉集卷第十四終

明治廿五年六月五日 日印刷
全 廿五年六月六日 出版 定價三十五錢

大阪市東區北久太郎町四丁目番外一番屋敷
圖書出版會社名代人

發行者 梅原忠藏

大阪市東區船越町二丁目百三番屋敷寄留
東京府士族

校正者 名倉熙三郎

大阪市東區德井町二丁目六十八番屋敷
前野活版所分店

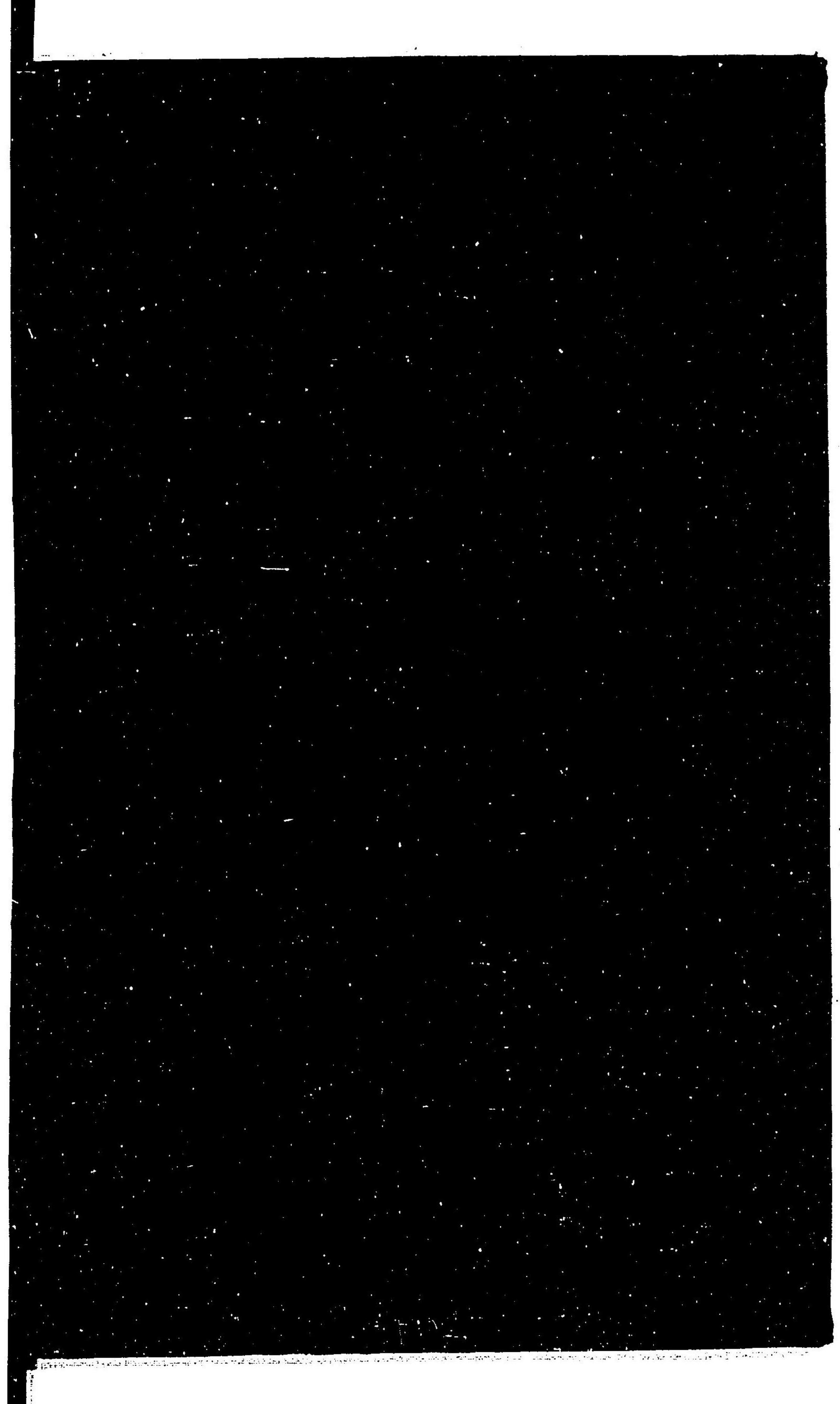
印刷者 前野茂久次

大阪市東區北久太郎町四丁目番外一番屋敷

發行所 圖書出版會社



85
85



68

85

